埋蔵文化財調査報告書27

天白元屋敷遺跡
（第３次）

1997

名古屋市教育委員会

埋蔵文化財調査報告書27

天白元屋敷遺跡
（第３次）

１９９７

名古屋市教育委員会

例　言

1. 本書は、名古屋市守山区大字中志段味字宮裏1015番地、字天白990番地他において、遺跡の範囲確認のため実施した天白元屋敷遺跡の第3次発掘調査報告書である。発掘調査は、平成7年(1995年)1月17日から平成7年(1995年)2月28日にかけて640㎡を対象に実施した。本書の作成は平成8年度に行なった。

2. 調査は、愛知県教育委員会文化財課の指導のもとに、国庫補助金の交付を受けて、名古屋市教育委員会が実施した。発掘調査に係わる調整事務は、教育委員会文化財課学芸員小島一夫が担当し、現地調査は名古屋市見晴台考古資料館学芸員野口泰子・伊藤厚史が担当した。発掘調査の排土工事請負は、渥美造園土木株式会社による。

3. 調査に用いた基準高は、東京湾の平均海面(T.P.)、座標系は建設省告示による第Ⅶ座標系である。基準点測量・水準測量は、関谷測量設計株式会社に業務委託した。現地での遺構平面図作成には遺跡調査汎用システム「カタタ」を使用した。現地写真は野口、伊藤が、遺物写真は伊藤が撮影した。昆虫写真は森勇一氏の提供による。

4. 出土遺物の分類、編年観は、尾野善裕氏（京都国立博物館）の調査、御教示による。中国陶磁は平出紀男(見晴台考古資料館)[redacted]による。昆虫遺体・種子の同定は、森勇一氏（愛知県立明和高等学校）による。遺物の整理、遺物実測図作成は、倉橋敦子・中嶋理恵による。製図は、神谷悦子・中嶋による。発掘調査の実施にあたり、名古屋市土地開発公社、野田喜代志氏、野田輝己氏のご協力をいただいた。

5. 出土遺物や調査にあたり作成した実測図、写真類は、名古屋市見晴台考古資料館で保管している。

6. 本書は、第4章5を森勇一氏、第5章1を尾野善裕氏、それ以外を伊藤厚史が執筆した。編集は伊藤による。

目　次

第１章　遺跡の立地環境
1. 地理的環境……1
2. 歴史的環境……4
第２章　調査の経緯
1. 調査に至る経過……8
2. これまでの調査……9
3. 第３次調査の経過……11
4. 遺跡の層序……13
第３章　検出遺構
1. Ｌ区……19
2. Ｍ区……22
3. Ｎ区……23
4. Ｏ区……24
第４章　出土遺物
1. Ｌ区……25
2. Ｍ区……29
3. Ｎ区……29
4. Ｏ区……30
5. 自然遺物……31
第５章　まとめ
1. 出土遺物の特色……39
2. 各調査区の成果……44
参考文献……46
写真図版……53

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図(1) (1／50,000)……1
第２図　遺跡位置図(2) (1／40,000)……2
第３図　周辺地形分類図 (1／40,000)……2
第４図　周辺の遺跡分布図 (1／50,000)……5
第５図　調査区位置図 (1／2,500)……10
第６図　調査区配置図 (1／500)……12

(　　)は縮尺

第７図　調査区基本層序対比模式図……14
第８図　Ｌ区土層断面図(1／50)……16
第９図　Ｌ区・Ｍ区土層断面図(1／50)……17
第10図　Ｎ区・Ｏ区土層断面図(1／50)……18
第11図　Ｌ区遺構平面図(1／150)……20
第12図　Ｌ区ＳＥ１実測図(1／30)……21
第13図　Ｌ区ＳＥ２実測図(1／30)……21
第14図　Ｍ区遺構平面図(1／100)……22
第15図　Ｎ区遺構平面図断面図(1／100)……23
第16図　Ｏ区遺構平面図断面図(1／100)……24
第17図　遺物実測図(1／3・8のみ1/6)……33
第18図　遺物実測図(1／3)……34
第19図　遺物実測図(1／3)……35
第20図　遺物実測図(1／3)……36
第21図　遺物実測図(1／3)……37
第22図　遺物実測図(1／5)……38
第23図　出土山茶碗(碗・皿)時期別底部延べ残存率図……40
第24図　尾張地域の中世遺跡出土土器・陶磁器比率の比較図…42

表　目　次

第１表　調査工程表……11
第２表　遺構一覧表……47
第３表　遺物観察表……48
第４表　遺物観察表……49
第５表　遺物観察表……50
第６表　遺物観察表……51
第７表　遺物観察表……52

第１章　遺跡の立地環境

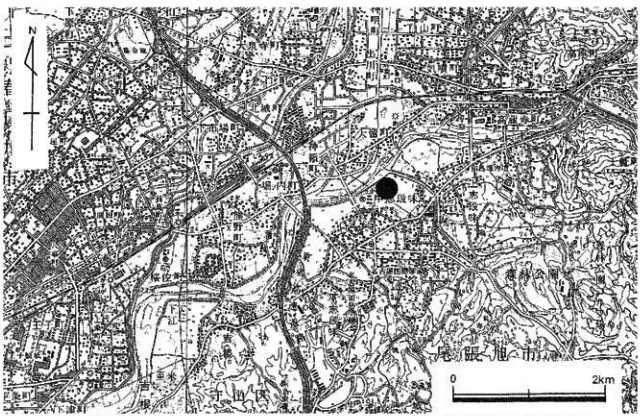
1. 地理的環境

名古屋市守山区は、名古屋市北東端に位置している。北は庄内川をはさんで春日井市、東は東谷山を分水嶺として瀬戸市、南はなだらかな尾張丘陵を越えて尾張旭市に続く。矢田川及び支流である香流川によって長久手町、名東区、千種区、東区、北区と接する。

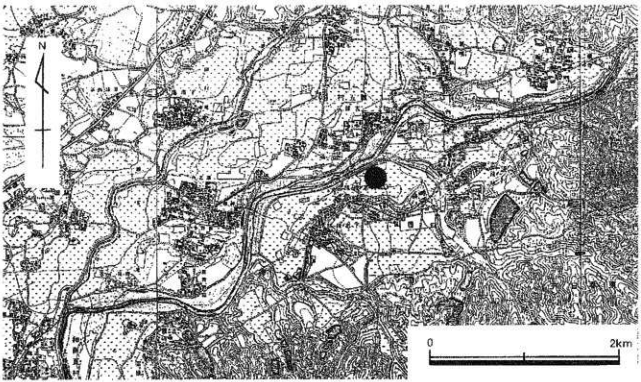
東部には、市内最高峰である東谷山(標高198.3m)がある。その大半は、秩父古生層と言われる中・古生層からなっている。東谷山は、三河山地の西端に位置する。東谷山の南には、東西方向に標高60～100mの尾張丘陵が広がっている。

尾張丘陵は、濃尾平野の東を取り巻くように発達しており、新第三紀層・古期洪積層からなる。この層は、最後期中新世から前期更新世にかけて出現した淡水性湖盆(東海湖)に向かって堆積したものである。一般に瀬戸層群と呼ばれ、上部の矢田川累層と下部の瀬戸陶土層からなる。矢田川累層は、矢田川流域にみられる地層を典型とするもので、砂礫層、粗砂・砂礫層、砂層、シルト層及びシルト・砂互層などの箇所がある。シルト・砂互層の箇所には、厚さ１m以下の亜炭層があり、1955年ごろまで亜炭の採掘が行われていた。瀬戸陶土層は、窯業原料となる陶土の産出層として有名である。丘陵は、北側及び南側に向かって開析され、浸食谷を刻んでいる。その多くの谷頭はせき止められて溜め池が築かれている。

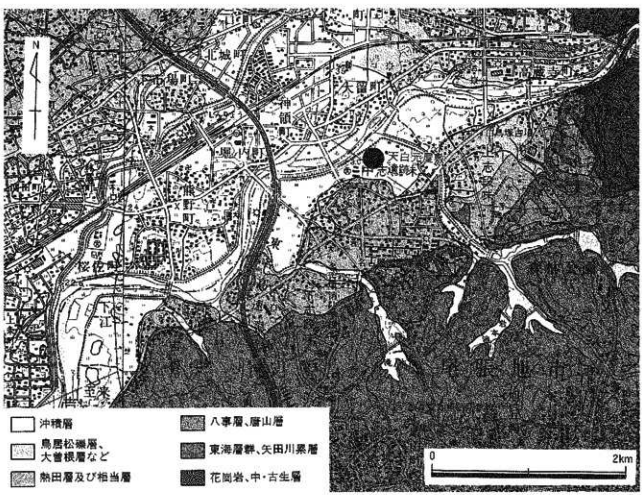
丘陵の北側は、高位段丘から低位段丘が発達している。高位段丘は、中期洪積層以前の段丘堆積層(高



第1図　遺跡位置図(1)（1/50,000）　国土地理院5万分の1地形図「瀬戸(平成5年)」「名古屋北部(平成2年)」



第2図　遺跡位置図(2)（1/40,000）　　大日本帝国陸地測量部「水野村・勝川村・(明治26年)」



第3図　周辺地形分類図（1/40,000）　　地形分類は「名古屋地域地質図」1988年による

30～100m)で、上志段味の東谷山山麓から中志段味にかけて局所的に分布する。中位段丘、低位段丘は比較的広範囲に平坦面を形成している。志段味及び吉根の集落はこの段丘面にのっている。尾張丘陵からはこの段丘を開析して、大矢川、野添川、長戸川(天王川)など小規模な河川が庄内川に流れ込む。また、沖積低地と接する中位段丘とは比高差15mの急崖となっている。

庄内川は、岐阜県内では土岐川と呼ばれ、多治見から瀬戸にかけては、急峻な谷あいを縫うように南流してくるが、東谷山を越える付近から緩やかに蛇行しながら西流する。そのため、志段味地区においては沖積低地が発達している。旧河道と現河川の間には微高地が形成されている。天白元屋敷遺跡は、庄内川左岸のこうした微高地上に立地している。近世まではこうした微高地上にも集落が営まれていたことが絵図から伺われるが、度重なる洪水により、近代以降段丘上へ移動している。

庄内川と矢田川に挟まれた守山・小幡地区にも、標高20～30mの段丘面がみられる。名古屋市街を見渡す段丘上は、名古屋と瀬戸を結ぶ交通の要地でもある。名古屋市街地の大半がのる中位段丘の熱田面に地形的には対比されるが、熱田面を構成する熱田層が砂層を主体とする粘土・シルトを挟む層であるのに対し、砂礫層を主体としている。

志段味から吉根にかけて蛇行する庄内川は、竜泉寺の高位段丘にあたると、以後大きく蛇行することなく西流する。矢田川と合流する左岸付近は、標高9～14mの沖積低地が広がり、微高地上に近世以来の集落が点在する。

2. 歴史的環境

天白元屋敷遺跡は、名古屋市北部を流れる庄内川右岸に発達した自然堤防上及び周辺の沖積低地に所在する。この庄内川流域及び支流の矢田川流域には多数の古墳が認められることで知られている。特に庄内川左岸には前期末の築造と考えられる白鳥古墳、豊富な副葬品が出土した中期の志段味大塚古墳、東谷山麓には後期の東谷山古墳群など、ほぼ古墳時代全期間を通じて古墳が築造された地域である。

天白元屋敷遺跡周辺には、際立って多くの古墳の築造は認められないが、本遺跡からは古墳時代の遺構、遺物が出土しており、集落址であったと考えられる。志段味地区では、古墳に較べて集落址の存在が今一つ明らかでない現状において、古墳築造集団の生活基盤を解明する上で看過できない位置を占めている。また、その後も古代、中世を通じて引き続き存続しており、庄内川に接して立地する環境からある時期川湊の機能を有していた可能性も指摘されている。このように長期にわたって存続している本遺跡は、当地域において重要な遺跡の一つである。

ここでは、天白元屋敷遺跡を取り巻く歴史的環境について、庄内川流域(守山区域及び春日井市域)に広がる遺跡を取りあげ説明する。

なお本文中志段味地区の記述は、大字上志段味、大字中志段味、大字下志段味、大字吉根の範囲を示す。

旧石器時代～縄文時代創草期

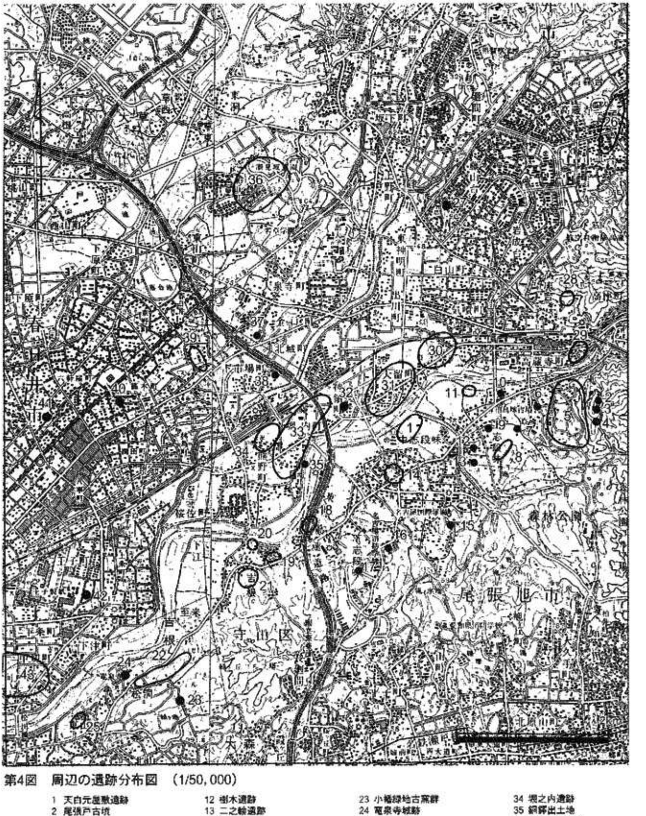
守山区大字上志段味に、槍先形尖頭器が出土した樹木遺跡が上位段丘縁端に立地する。庄内川右岸では、春日井市上八田遺跡、浅山町遺跡、梅ケ坪遺跡が下位段丘(小牧面)縁端、梅ケ坪南遺跡が低位段丘(鳥居松面)に立地する。これらの遺跡は、300～600mの近接した距離で点在しており、旧石器時代遺跡の少ない尾張地方において注目される地域である。

縄文時代

守山区大字小幡字北屋敷に所在する牛牧遺跡は、1958、59、61年に調査され、晩期の住居跡、甕棺墓、土壙墓などが出土した。志段味地区では東谷山麓の白鳥遺跡、二之輪遺跡、大塚遺跡、川東山遺跡などで遺物が採集されている。また笹ケ根、深沢両古墳群の調査の際に、縄文土器片、石鏃が出土している。対岸でもこれまで篠木遺跡が知られているにすぎなかったが、近年の調査で町田遺跡、松河戸遺跡から遺物が出土した。両者は沖積地に立地している点で注目される。沖積地に埋もれている未発見遺跡も多いと思われる。

弥生時代

守山区では、宮前包含地、西城遺跡、高縄包含地、牛牧遺跡、牛牧離レ松遺跡、天白元屋敷遺跡が知られている。宮前包含地、牛牧遺跡は中期後葉(高蔵期)、牛牧離レ松遺跡は中期前葉～後葉、西城遺跡は後期後半(欠山期)の土器が出土している。志段味地区では、銅剣出土地がある。低位段丘端に位置し、土壇状の高まりに横穴式石室かと思われる石積みの残骸する場所から出土したようである。銅剣は二次加工が施されていた。



第4図　周辺の遺跡分布図　（1/50,000）

1 天白元屋敷遺跡
2 尾張戸古墳
3 中社古墳
4 南社古墳
5 東谷山古墳群
6 白鳥塚古墳
7 志段味大塚古墳
8 大久手古墳群
9 勝手塚古墳
10 志段味銅剣出土地
11 海東遺跡
12 樹木遺跡
13 二之輪遺跡
14 瀬ヶ遺跡
15 南原古窯
16 長廻間古窯群
17 長廻間南古窯
18 東禅寺古墳群
19 深沢古墳群
20 上島古墳群
21 笹ヶ根古墳群
22 松ヶ洞古墳群
23 小幡緑地古窯群
24 竜泉寺城跡
25 川東山遺跡
26 高蔵寺古窯群
27 白山中世遺跡
28 高座山遺跡
29 高蔵寺古墳群
30 気噴遺跡
31 大留遺跡
32 下大留城跡
33 神領遺跡
34 堀之内遺跡
35 銅鐸出土地
36 潮見坂古窯群
37 オセンゲ古墳
38 下市場中世遺跡
39 篠木8丁目遺跡
40 浅山町遺跡
41 上八田遺跡
42 王子遺跡
43 松河戸遺跡

志段味地区では、天白元屋敷遺跡から少量の土器が出土するが、良好な遺跡は確認されていないのが実情である。庄内川左岸では、近年の国道302号線建設に伴う大規模な調査が行われている。勝川遺跡では、低位段丘(鳥居松段丘)上に後期の住居跡と方形周溝墓、段丘下沖積地に中期の木器未製品の貯蔵土坑や掘立柱建物群が検出されている。段丘下の沖積地では、これまでは王子遺跡が知られている程度であったが、町田遺跡、松河戸遺跡の存在が明らかになった。町田遺跡は地蔵川を挟んで勝川遺跡と接しており、後期の住居跡や方形周溝墓が検出されている。松河戸遺跡は、前期の溝(幅12m、深さ0.9m)が検出されている。

志段味地区の対岸付近では、自然堤防上に立地する南気噴遺跡、大留遺跡、神領遺跡、堀之内遺跡がある。他に神領銅鐸出土地がある。銅鐸は三明神社の宝物として保管されているが、江戸時代に神社境内に接した低地から2個出土したものである。1個は行方不明であるが、現存する銅鐸は、突線鈕3式(三遠式)である。左岸の志段味銅剣出土地と共に青銅器埋納遺跡として興味深い。

古墳時代

守山区大字上志段味に所在する白鳥塚古墳は、段丘端に築造された全長109mの前方後円墳である。時期は、4世紀後半頃と推定され名古屋市内では最も古い築造と考えられている。東谷山山頂には尾張戸神社古墳、尾根上に中社古墳、南社古墳が築造される。これらは白鳥塚古墳の後に続いて築造されたと推定されている。同じ5世紀代には、段丘上に帆立貝式古墳の勝手塚古墳、志段味大塚古墳、東大久手古墳、西大久手古墳が築造される。志段味大塚古墳は、全長51.5mを測り、五鈴鏡、鉄鏃、挂甲小札、環鈴、馬具などが出土している。6世紀代には、東谷山麓に円墳が多数築造された。中でも東谷山第16号墳は直径30m、高さ3mを測り、全長18m(玄室長6m・羨道12m)の横穴式石室をもち、東谷山古墳群中最大規模をもつ。

下志段味・古根地区には、東禅寺古墳群、笹ケ根古墳群、深沢古墳群、上島古墳群、松ケ洞古墳群などが築造された。5世紀代の笹ケ根1号墳、3号墳、松ケ洞8号墳、9号墳は木棺直葬墳である。松ケ洞8号墳は方墳である。東禅寺古墳群、笹ケ根2、4号墳、深沢1号墳、上島古墳群は横穴式石室を内部主体として築造されている。

守山地区、小幡地区には、矢田川に沿った段丘上に立地して、守山白山古墳、瓢箪山古墳、長塚古墳、池下古墳、茶臼山古墳など前方後円墳が築造されている。

集落遺跡は、庄内川左岸では上流側から海東遺跡、天白元屋敷遺跡、湿ケ遺跡、宮前包含地、川東山遺跡、牛牧離レ松遺跡、右岸では同様に気噴遺跡、大留遺跡、神領遺跡、堀之内遺跡、柏井遺跡、松新遺跡、勝川遺跡、町田遺跡が知られている。

志段味地区では、沖積地の自然堤防に立地する海東遺跡、天白元屋敷遺跡、中位段丘に立地する宮前包含地、湿ケ遺跡がある。庄内川を見降ろす上位段丘に立地する川東山遺跡では、5世紀代の須恵器が採集されている。庄内川を挟んで海東遺跡と対面している気噴遺跡は、最近の調査で住居跡が確認されている。松河戸遺跡では遺構は散在する程度であった。古墳時代後期の土器焼成坑と思われる遺構が検出されている。流域における居住地は、築造された古墳の数に較べまだほとんど明らかにされていないのが実情である。

古代

この時代の遺跡は、海東遺跡、天白元屋敷遺跡、湿ケ遺跡、小幡廃寺がある。海東遺跡、天白元屋敷遺跡とも古墳時代から続く遺跡である。志段味地区は、尾張国八郡のうち、山田郡志賦(談)に該当すると考えられており、天白元屋敷遺跡や海東遺跡が該当する集落の一つであったのかもしれない。小幡地区には、字西新地区と字花ノ木地区の2箇所から瓦が出土し両者とも小幡廃寺と称する。尾張丘陵の末端部には、奈良時代には吉根古窯、平安時代には南原古窯、長廻間南古窯、生下り1号窯、八竜1～3号窯、小幡緑地古窯群(3基)、松ケ洞古窯が築かれた。

庄内川右岸では、気噴遺跡、大留遺跡、大留荒古遺跡、神領遺跡、堀之内遺跡、勝川遺跡、町田遺跡、勝川廃寺がある。勝川廃寺は東西約200m、南北約158mの寺域が想定されている。高蔵寺瓦窯が瓦の供給地である。支流内津川に面した高蔵寺丘陵では、藤山台9丁目遺跡で奈良～平安時代の骨壷が出土している。

中世

鎌倉時代、山田郡は山田庄の名で呼ばれる。治承4年(1180年)12月23日、山田荘志田見郷の司職に平高家が任ぜられている。寿永3年(1184)2月11日、平高家は改めて志談郷の郷司に任ぜられている。

志段味地区では、大塚遺跡、天白元屋敷遺跡、湿ケ遺跡、山神遺跡、長廻間古窯群(3基)、長廻間東古窯、竜泉寺城跡、志段味城跡がある。志段味城跡の正確な所在地は不明である。小幡地区には小幡城跡、守山地区には守山城跡がある。小幡城は、16世紀初頭に岡田与七郎によって築城されたといわれ、1535(天文4)年には松平清康が一時入城したが、守山城において暗殺された後には、守山城に入った織田信光の持城となった。小牧・長久手の戦いでは、徳川家康方の城として修復され、守り堅固の城として重要な役割を果たした。

庄内川右岸には、白山中世遺跡(祭祀遺跡)、大留城跡、白山古墓、下市場中世遺跡、下大留城跡、上条城跡などがある。

第２章　調査の経緯

1. 調査に至る経過

名古屋市守山区は，1963年(昭和38年)に当時の守山市が名古屋市と合併したことにより誕生した街である。帝泉寺丘陵を境に南部は、名古屋市の中心に隣接していることもあり、瀬戸街道に沿って早くから宅地化が進行した地域である。これに対して北部の志段味地区は、交通の便が悪かったことにより、都市化が遅れ、緑豊かな田園風景を残してきた地域である。

このような中で教育委員会は、1970年代になっても市内有数の文化財の宝庫といわれる守山区の遺跡分布状況については、独自の資料をもたない状況であった。そのため1978、79年に志段味地区を中心とした守山区の分布調査を実施し、1980年に守山区遺跡分布図を刊行し今後の開発に対応できるよう準備を整えた。

今回調査を実施した天白元屋敷遺跡が正式に遺跡として認められたのは、この時の分布調査の結果である。天白元屋敷遺跡は、分布調査により良好な状態で遺物が多量に採集され、その範囲は庄内川に沿って広がる沖積地の標高29mの等高線が囲む南北約250m、東西約100mの微高地を中心に、標高27～30mを測る南北約375m、東西約175mの楕円形の範囲内、面積約６万㎡に達すると想定されるに至った。

ところでこの時期、相前後して志段味地区は、特定土地区画整理方式による市街地化に動き出すとともに、民間資本によるミニ住宅開発も進行し始めていた。天白元屋敷遺跡の周辺は、水田や畑地として利用されていたが、将来的に開発事業は避けられない状況であり、正確な範囲も確定しないまま開発行為に直面することを避けるために、国・県の指導により長期的な展望にたち、本遺跡の範囲、性格を確認するための発掘調査を実施することにした。1984年度に第１次発掘調査を実施し、1985年度に第２次発掘調査を実施した。そして今年度、第３次発掘調査を実施に至った次第である。

写真1　遺跡遠景(東から)　　1995年2月撮影

2. これまでの調査

第1次発掘調査

1984年(昭和59年)10月15日から翌年2月15日にかけて実施した。今回の調査は、地形及び遺跡の範囲を勘案して、遺跡の東部、西部、西北部に各1箇所、南部に3箇所の調査区を設定した。調査区はそれぞれA～F区と呼称する。調査面積は合計約1,000㎡である。

A区は、明確な遺構は検出されなかったが、直立した状態で角柱状の礫が2点出土し、火を使用した施設の痕跡と考えられる。出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中世陶器、近世陶器などがある。弥生土器は、壺、甕、鉢などの器形がみられる。土師器は古墳時代前期のものと奈良・平安時代のものが多い。最も出土量の多いものは、8～9世紀代の須恵器であった。また、中世陶器は、14～15世紀代の山茶碗、14～16世紀前半頃の古瀬戸がみられた。B区は、8～9世紀の須恵器が一定の範囲に集中して出土した。C区は、洪水の氾濫による砂礫の堆積層が厚く遺構は検出されなかった。D区は、遺構検出面が5面あり、古墳時代の土坑、中世末の溝、近世の溝などを検出した。E区は、土坑が検出されA区同様の直立した石がみられ、焼土ブロック及び炭化物片を含む埋土であった。F区では集積された石が17箇所で検出した。古代、中世の遺物もみられたが近世の遺物も出土しており、集石の時期は近世頃と思われる。

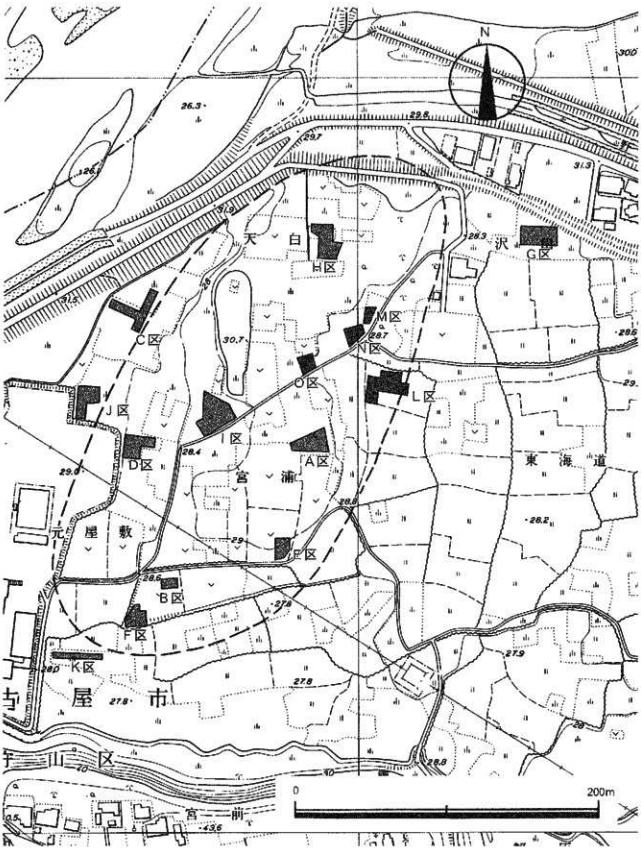
遺跡の範囲は、西部、南部ではより拡大すると想定され、遺跡形成の時期が弥生時代にまで遡ることが判明した。また8～9世紀代と14～16世紀代に集落の繁栄がみられると想定されるに至った。

第2次発掘調査

1985年(昭和60年)12月16日から翌年3月10日にかけて実施した。調査区は第1次調査の成果を受けて、北部、北東部、中央部、西部、南部に各1箇所計5箇所設定した。調査区は、それぞれG～K区と呼称する。調査面積は合計約1,300㎡である。

G区は、包含層が認められ須恵器、灰釉陶器、山茶碗、美濃大窯製品などが出土した。主体となるのは中世である。H区は、60～70cmの厚さの包含層を確認した。包含層は、近世遺物の有無により2層に分けることができた。下層包含層は、古代～中世の遺物を均一的に含んでいた。遺構は、掘立柱建物、焼土を伴う土坑を検出した。8世紀～9世紀後半と推定された。I区は、遺構は検出されず、二次堆積と思われる包含層を検出したに留った。遺物の中には布目瓦があり注目された。J区は、井戸1基を検出した。井桁材の外周に河原石を組んだものである。井桁内で桶を検出した。出土遺物から15世紀代の使用、16世紀代の埋没と推定された。K区は、18個のピットを検出した。この内14個はほぼ1列に並んでいた。15、16世紀頃の年代と推定される。

遺跡の範囲は、北東部、南西部はより拡大することが明らかとなった。遺跡の形成に関しては、微高地上に古代、中世の時期に人々の生活があったと思われるが、中世期になると微高地下の砂礫層上面においても生活の痕跡が広がったと推定された。



第5図　調査区位置図(1/2,500)　　破線は遺跡推定範囲

3. 第3次調査の経過

今回の調査は、1995年(平成7年) 1月17日から2月28日までの期間で実施した。10年前に実施した2次にわたる調査と同様、遺跡の推定範囲の確認及び性格を把握することを目的として、推定範囲東部に調査区4箇所を設定した。調査区はそれぞれL～O区と呼称する。所有者は名古屋市土地開発公社である。

調査面積は、L区約360㎡、M区約55㎡、N区約115㎡、O区約110㎡で合計約640㎡である。調査日程は第1表の通りである。

L区

調査区は、遺跡推定範囲の東端、標高29mの等高線で囲まれる微高地の東方20～40mに位置する。これまで水田として利用されてきたが、現状では荒蕪地である。地番は、守山区大字中志段味字宮裏1015番、同1017番である。地表面の標高は、28.8～28.9mである。

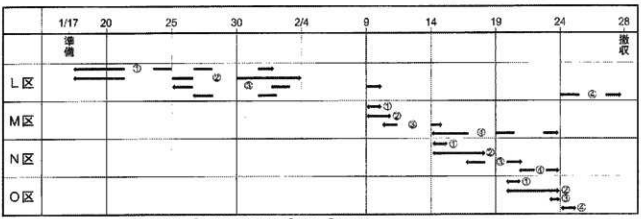
調査は、調査区を設定した土地の中に排土を積み置きにしなければならないため、3回(中央区、南区、北区)に分けて実施した。耕土、床土の下層には灰褐色砂質土が30～50cmの厚さで堆積していた。この層は、須恵器や中世陶器を含む遺物包含層である。この層の下は、白灰色砂層でさらにその下は灰青砂色層であった。この砂層以下は無遺物層であったので、白灰色砂層を基盤として遺構検出を行った。遺構検出の結果、石組をもつ井戸2基、ピット及び杭を検出した。調査終了後、井戸は砂で埋め戻した。

M区

調査位置は、標高29mの等高線で囲まれる微高地に隣接する。本来微高地であったところを開墾により水田化したと思われる。地番は守山区大字中志段味字天白1002番ー1である。地表面の標高は28.8～28.9mである。

表土除去の結果、北側は包含層は存在していなかったが南側は10cm程残っていた。中央部に試掘溝を入れ地山の土層図を作成した。農業を営む野田喜代

写真2　調査風景　(L区)



第1表　調査工程　(①表土除去　②包含層・遺構掘削　③測量　④埋戻し)

志氏の話によれば、この水田は水持ちが悪いとのこと。耕土直下が砂層であることが原因であろう。

N区

調査位置は、M区の南側に隣接する。地番は守山区大字中志段味字天白1003番である。地表面の標高は28.8～29.1mである。M区と合せて一つの調査区とする予定であったが、重機の乗り入れが困難であったため、二つに分けた。南西側は人頭大の河原石を多量に含む砂礫層が堆積していた。包含層及び遺構は東側に集中していた。

O区

調査位置は、M区の南西約25mに位置する。地番は守山区大字中志段味字天白990番、同990番－1である。地表面の標高は28.8～29.3mを測る。

遺物包含層は灰褐色土で、砂礫層は検出されなかった。遺構は南北方向の溝を検出した。

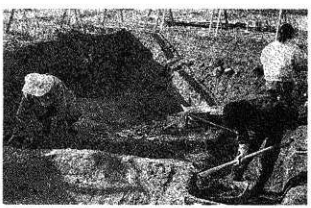
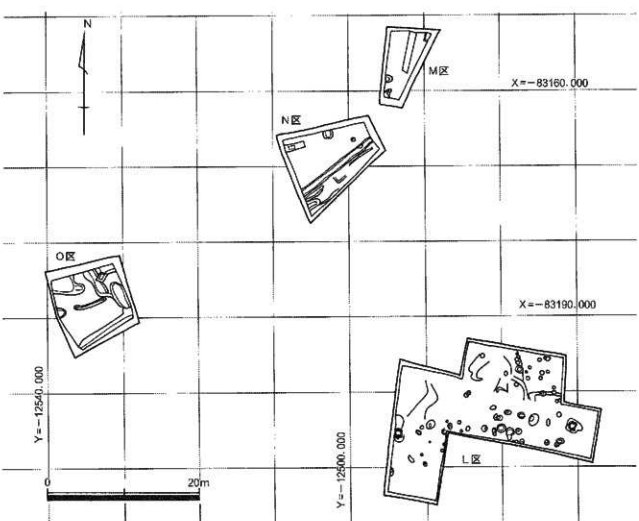


写真3　調査風景　（N区）



第6図　調査区配置図　（1/500）

4. 遺跡の層序

（1）これまでの調査地点の層序

A区

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は遺物包含層で、上部は黄灰色砂シルトで、近世陶器片も少量含む。上部以下は茶褐色砂シルトで出土遺物も増加する。第Ⅲ層は灰白色砂層、第Ⅳ層は灰白色砂シルト、砂礫層である。第Ⅲ層を基盤層とした。

B区

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層淡黄褐色砂シルトで細かい砂質土。第Ⅲ層は淡褐色砂質土。第Ⅳ層は灰褐色砂シルトで、下層は石が密な砂礫層。第Ⅲ層を基盤層とした。

C区

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は黄灰色砂シルト、下部は淡灰褐色砂シルト、第Ⅲ層は砂礫層で、地表下約2.0mまで掘り下げたが砂礫層はなお続く状況であった。

D区

第Ⅰ層は表土、第Ⅱ層は灰褐色シルト、第Ⅲ層は暗灰褐色シルト、第Ⅳ層は第Ⅲ層より粘性の強い土質である。第Ⅴ層は黒褐色砂シルトで植物遺体を多く含む。第Ⅲ～Ⅴ層は遺構埋土。第Ⅵ層は茶褐色砂シルトで、この層中で遺構検出面を3面確認した。第Ⅶ層は淡灰褐色砂質土で基盤層とした。

E区

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は黄灰褐色砂質土、第Ⅲ層は淡茶褐色砂質土で基本的に無遺物層でA・B区のⅢ層に類似する。第Ⅳ層は灰褐色砂質土、第Ⅴ層は砂礫層である。砂礫層中からかなり摩滅した弥生土器片が出土した。

F区

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は黄灰色砂シルトで、上部は粘性があり下位ほど砂質が強い。第Ⅲ層は灰褐色砂質土、第Ⅳ層は砂礫層で、第Ⅲ層を基盤層とした。

G区

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は灰白色砂礫層、第Ⅲ層は橙褐色土、第Ⅳ層は灰褐色土で、第Ⅲ層、第Ⅳ層が遺物包含層である。第Ⅴ層は灰青色シルト質土で無遺物層である。

H区

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は黄灰褐色土、第Ⅲ層は茶褐色砂質土の上層と暗茶褐色砂質土の下層に分層でき良好な包含層である。第Ⅳ層は茶褐色粘質土で無遺物層である。第Ⅴ層は河原石を多く含む灰色砂礫層で、弥生土器片、土師器片が出土した。

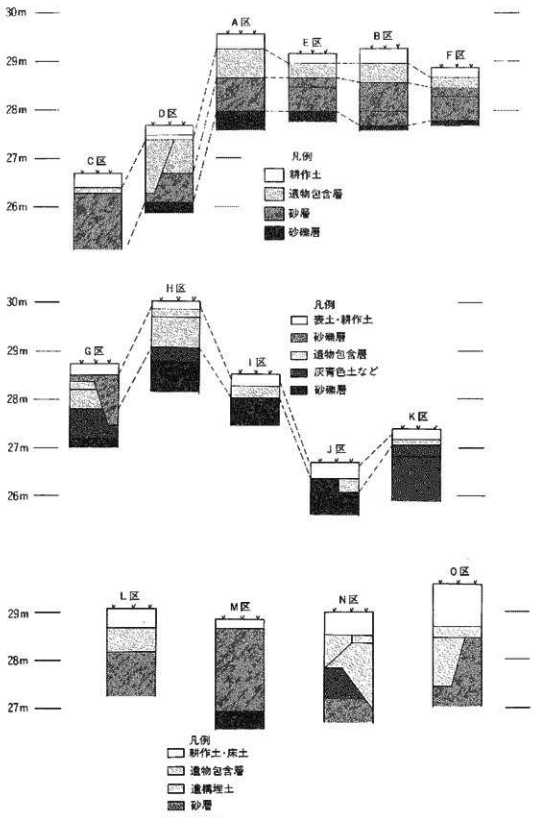
I区

第Ⅰ層は表土、第Ⅱ層は黄褐色または灰褐色土、第Ⅲ層は砂礫層である。

J区

第Ⅰ層は表土、第Ⅱ層は灰白色砂礫層である。井戸はこの砂礫層の上位より石が組まれている。

K区



第７図　調査区基本層序対比模式図　標高はＴ．Ｐ．値

第Ⅰ層は耕作土、第Ⅱ層は黄褐色土(床土)、第Ⅲ層は灰褐色土、第Ⅳ層は灰白色砂層または灰青色シルトである。第Ⅲ層上面でピット列を検出した。第Ⅳ層は湧水レベル1.0～1.3mまで掘り下げたが砂礫層は検出されなかった。

（2）今回の調査地点の層序

L区

調査区東壁(第11図A－A′)は、第1層(厚15cm)は耕作土、第2層(5～15cm)は淡灰色土で床土、第3層(30～50cm)は灰褐色土で0.5～10cm大の礫を含む砂質土。この層は須恵器や中世陶器を含んでいた。第4層(20cm)は白灰色砂で無遺物層であったため、この上面で遺構検出を行った。第5層は灰青色砂である。

調査区西壁(第11図D－D′)は、第1層(20cm)耕作土、第2層(5～10cm)、第3層(5～20cm)は灰色土で、床土である。第4層(10cm)は淡灰褐色土、第5層(20cm)、第6層(20～40cm)は灰褐色土で、遺物包含層である。第11層は青灰色砂、第12層は灰青色砂で無遺物層であるので、この上面で遺構検出を行った。

M区

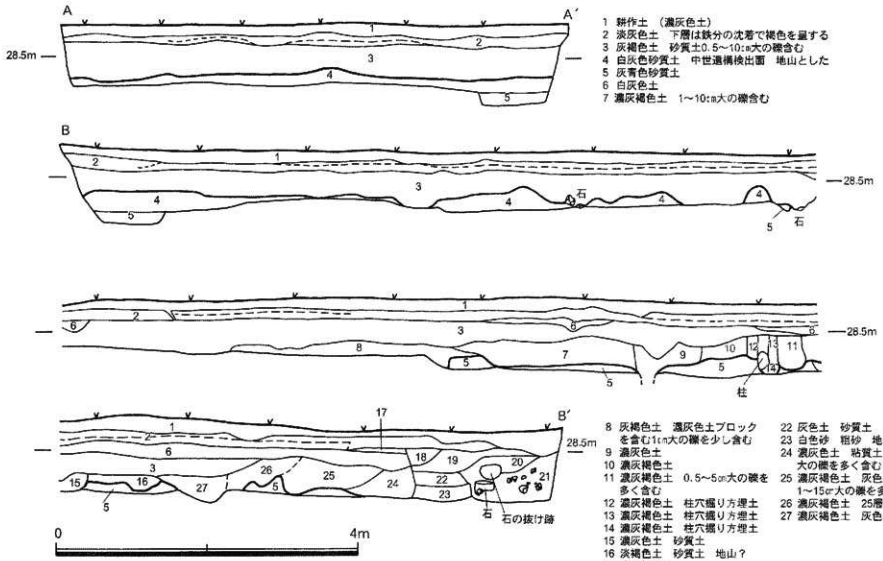
調査区西(第14図A－A′)は、第1層(20cm)は耕作土、第2層(5cm)は淡灰色土、第3層は灰褐色土で鉄分を多く含む。第4層は灰褐色砂質土で1～20cm大の礫が集中する。第6層、第7層は無遺物層であるので基盤とした。念の為トレンチ掘り(第14図第B－B′)を行ったところ、砂層が続き、1.4m下で礫層(第14層)を検出した。

N区

調査区南壁(第15図A－A′)は、第1層(20cm)は耕作土、第2～4層(25cm)は淡灰色土、第6層(60cm)は灰白色粗砂と礫が混じる層で、礫が多い。第13層(50cm)は灰褐色土で、中世の遺物包含層である。第7層は黄白色砂で基盤とした。第13層は、L区の灰褐色土とした遺物包含層につながる層と想定される。

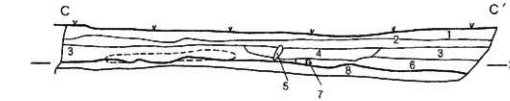
O区

調査区南壁(第16図A－A′)は、第1層(40～70cm)は耕作土、第2層(20～40cm)は灰黄色土、第3層(10～30cm)は灰褐色土で茶褐色土と灰色の混じった層、第4層(15～50cm)は灰褐色土と白黄色砂が入り混じった層である。第2、3層が遺物包含層である。第3層下層で遺構検出を行った。調査区東寄りのSD1を検出した付近では白黄色砂が基盤層であった。対して西寄りでは、第4層を遺構埋土としてとらえ、掘削したが遺物を含まなかったことから、第4層あるいはその途中の第4′層からが基盤層と考えられた。基盤層の標高は、28.5～28.7mである。

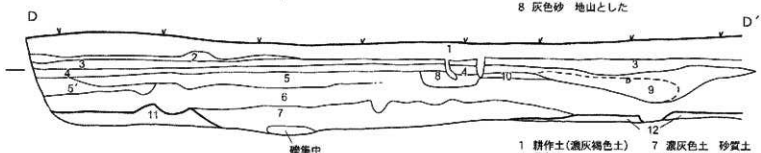


1 耕作土 (濃灰色土)
2 淡灰色土 下層は鉄分の沈着で褐色を呈する
3 灰褐色土 砂質土0.5~10cm大の礫含む
4 白灰色砂質土 中世遺構検出面 地山とした
5 灰青色砂質土
6 白灰色土
7 濃灰褐色土 1~10cm大の礫含む
8 灰褐色土 濃灰色土ブロックを含む1cm大の礫を少し含む
9 濃灰色土
10 濃灰褐色土
11 濃灰褐色土 0.5~5cm大の礫を多く含む
12 濃灰褐色土 柱穴掘り方埋土
13 濃灰褐色土 柱穴掘り方埋土
14 濃灰褐色土 柱穴掘り方埋土
15 濃灰色土 砂質土
16 淡褐色土 砂質土 地山?
17 淡色褐色土
18 灰褐色土
19 淡灰色土と白色砂ブロックの混在
20 灰褐色土
21 灰褐色土 礫が集中
22 灰色土 砂質土
23 白色砂 粗砂 地山?
24 濃灰色土 粘質土1~15cm大の礫を多く含む
25 濃灰褐色土 灰色が強い 1~15cm大の礫を多く含む
26 濃灰褐色土 25層より褐色
27 濃灰褐色土 灰色が強い

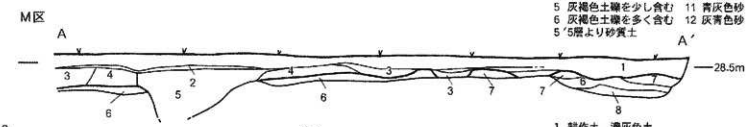
第8図 L区土層断面図 (1/50)



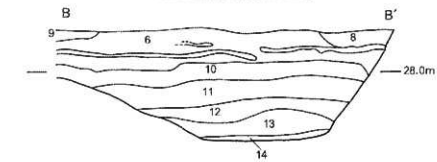
1 耕作土 (灰色土)
2 灰色土
3 灰褐色土 1~20㎝大の礫と鉄分を多く含む
4 灰褐色土 1~5㎝大の礫を含む
5 灰白色砂
6 濃灰褐色土 砂質土
7 灰白色シルト
8 灰色砂 地山とした



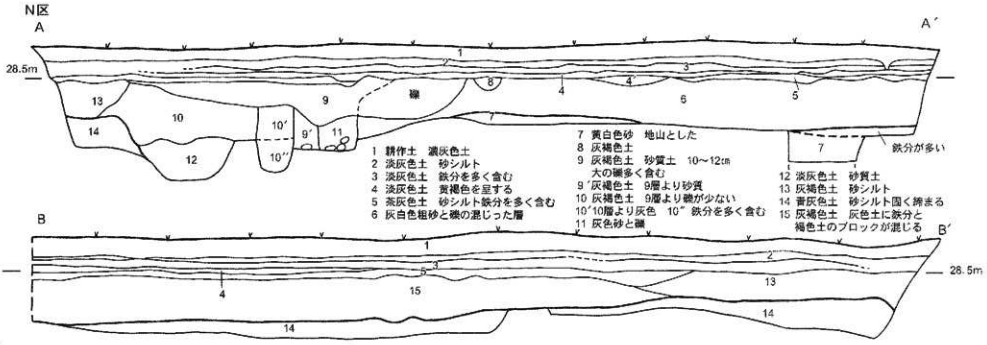
1 耕作土(濃灰褐色土)
2 灰色土
3 灰色土
4 淡灰褐色土
5 灰褐色土礫を少し含む
6 灰褐色土礫を多く含む
5′5層より砂質土
7 濃灰色土 砂質土
8 白灰色土 砂質土
9 白灰色砂 5~20㎝大の礫を多く含む
10 淡灰色土
11 青灰色砂 地山とした
12 灰青色砂



1 耕作土 濃灰色土
2 淡灰色土
3 灰褐色土
4 灰褐色土
5 灰褐色土
6 淡褐色土 灰褐色シルトを帯状に含む地山とした
7 灰白色土 粗砂 地山とした
8 淡褐色土 地山とした
9 白灰色砂 粗砂 地山とした
10 灰黄色砂 粗砂 地山とした
11 灰黄色砂 10層より粒子が細かい 地山とした
12 褐色土 砂シルト 地山とした
13 淡灰色砂 粗砂 地山とした
14 礫層 地山とした



第9図 L区・M区土層断面図 (1/50)



第10図　N区・O土区層断面図　(1/50)

第３章　検出遺構

調査箇所は、４箇所に分れているため、各調査区ごとに説明する。遺構名は、現地調査時には各調査区ごとに検出順にＮｏ．１～と付けていったが、現地調査終了後の遺物整理時に表記を一部変更し、溝状遺構はＳＤ、ピット(柱穴・小穴)はＰ、井戸はＳＥ、土坑はＳＫ、形状不明瞭な遺構はＳＸとして表わした。

１．Ｌ区

ピット及び杭

ピットは、56基検出した。この内、木が遺存していたピットは13基、石が出土したピットは４基あった。木の多くは加工痕があり、柱材の一部である。杭は６本あった。

Ｐ２は２段に掘られ、上段は直径約83×75cm、深さ約18cm、下段は直径約60×40cm、深さ約９cmを測る。Ｐ５は直径約70×50cm、Ｐ６は直径約80×60cmを測ったが、浅い凹みであった。Ｐ８は浅い土坑状となった。直径約165×110cm、深さ約20cmを測る。Ｐ10は約70×60cm、深さ約15cmを測る。直径約12cmの木が遺存していた。Ｐ11は直径約90×90cm、深さ約19cmを測る。木２本が遺存していた。内、西側の木(直径約13cm)は石を礎にしていた。東側の木は直径約５cmを測る。また、南側に直径約65×40cmのピットを接して検出した。Ｐ12は２段に掘られ、上段は直径約90×90cm、深さ約14cm、下段は直径約55cm、深さ約13cmを測る。下段に直径約14cmの木が遺存していた。Ｐ13は２基のピットが接して検出された。北側は直径約60×50cm、深さ約13cmを測る。直径約15cmの木と北に接して直径約５cmの木が検出された。南側は直径約44×32cm、深さ約10cmを測る。直径約15cmの木が検出された。Ｐ15は２段に掘られ、上段は直径77×50cm、深さ約４cm、下段は直径約50×35cm、深さ約17cmを測る。Ｐ16は直径約65×50cm、深さ約７cmを測る。中央で検出された木は、直径８cm、南側で検出された木は、直径約10cmを測る。Ｐ22は直径約70×37cm、深さ約22cmを測る。木は直径約18cmを測る。Ｐ25は直径約36×35cm、深さ約19cmを測る。中に一辺20×15cm角の石が入っていた。Ｐ34は東側は直径約40×46cm、深さ約19cm、西側は直径約35×30cm、深さ約16cmを測る。Ｐ35は２段に掘られ、上段は直径約40×47cm、深さ約11cm、下段は直径約38×34cm、深さ約６cmを測る。Ｐ40は２段に掘られ、上段は直径約46×45cm、深さ約26cm、下段は直径約30×35cm、深さ約14cmを測る。Ｐ52は直径約42×54cm、深さ約10cmを測る。直径約10

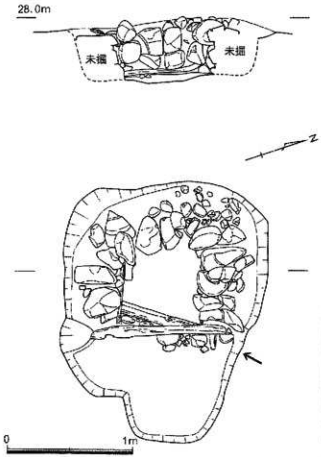
写真4　Ｌ区北部　柱穴

cmの木が遺存していた。P53は直径約41cm×42cm、深さ約16cmを測る。直径約14cmの木が遺存していた。P54は直径約130×50cm以上、深さ約11cmを測る。横たわった木と共に杭状に深く突き刺さった細い木が遺存していた。

SE1

調査区東端、基盤層とした白灰色砂層で検出した。方形石組井戸で、東辺を除き川原石を小口を内に向け2段積みされていた。東辺は端に杭をうち、杭にもたれるように表面を炭化させた木を横に渡していた。

第11図　L区遺構平面図　(1/150)



第12図　SE1　実測図 矢印は写真5方向

丸木は2段に積まれていたが、下段の丸木は裏込めに入れた河原石の重みで内側にせりだしていた。他の3辺も下に木を横に渡し、その上に積んでいた。木は、石の重みで折れていた。裏込めには握り拳大の石を入れていた。東側は完掘したが8cm程で浅い。石組内の埋土は、暗灰色砂質土で粘質土を多く含んでおり、中世陶器が出土した。掘りかたは、石組のある3辺は、石との際間は少なく、東側は広く掘られていた。底部は砂地のままであった。底面の標高は、27.86mである。石組内側の規模は、幅約70cm四方、深さは約50cmであった。

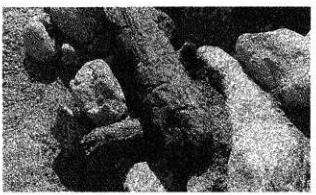
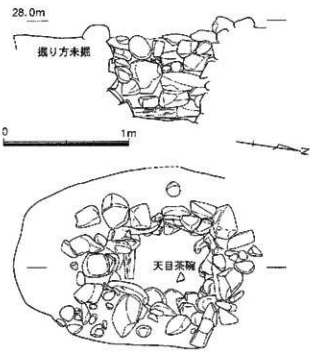


写真5　SE1（部分）



第13図　SE2　実測図

SE2

調査区西端、基盤層とした灰青色砂層で検出した。河原石積み方形井戸で、隅にも面取りするように積んでいるため、円形に見える。底部に角材を方形に置き、その上に河原石を3～5段乱雑に積み上げている。掘りかたは、南側では明瞭に検出できたが、東側は不明瞭であった。北側は初回の掘削区にあたり撹乱されていて検出できなかった。石組内の埋土は、検出面では淡灰褐色砂であったが、掘り進むと暗青灰色粘質土や灰褐色粗砂のところがあった。底部は砂地のままであった。底面の標高は27.20mを測る。石組内側の規模は、東西約45～80cm、南北約50～85cm、深さ約75cmを測る。写真図版6－8の遺物は、底面より約10cm上位で出土した天目茶碗(第17図－9)である。

2. M区

ＳＫ１

調査区北東端で検出した。北及び東は調査区外に続く。検出長約100cm×85cm、深さは11～14cmを測る。出土遺物は中世陶器がある。

ＳＫ２

調査区西端で検出した。西は調査区外に続く。検出長は東西約58cm、南北約70cmを測る。深さは約29～36cmを測る。埋土は灰褐色土で、礫を少し含んでいた。出土遺物は中世陶器、中国陶磁がある。

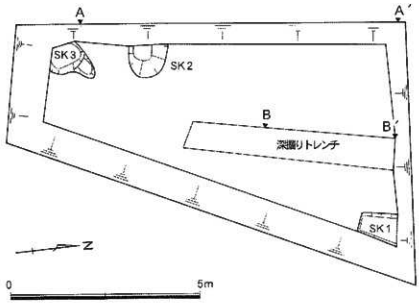
ＳＫ３

調査区南西端で検出した。規模は65×50cm以上、深さは18～29cmを測る。出土遺物は中世陶器がある。

試掘トレンチ

北寄りに長さ3.7m、幅0.5mの規模で設定した。深さ約1.5mまで掘削したところ、遺物包含層はなく約1.4mで礫層に達した。

写真6　M区トレンチ土層



第14図　M区遺構平面図　(1/100)

3. N区

SD2

調査区東寄りで、南北方向に一直線に延びる溝状遺構である。西壁と底部は基盤層の黄白色砂で、東壁は灰褐色砂質土(遺物包含層)を切っていた。埋土は灰褐色土で、礫を多く含んでいた。北寄りの底は、砂利層が堆積していた。検出長約11.6m、幅85～100cm、深さ約50cmを測る。溝底のレベルは、北端から南に緩やかに下がる。出土遺物は、弥生土器(又は土師器)の小片があるが混入と思われる。

SD1

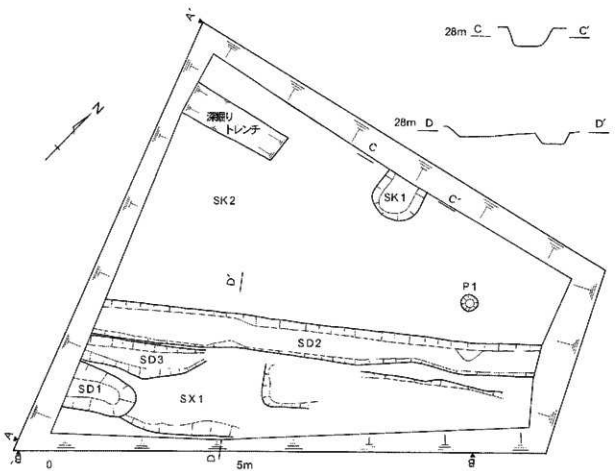
検出長約1.8m、幅約1.5m、深さ約0.5～0.6mを測る。埋土は砂質の強い淡灰色土である。出土遺物は須恵器、土錘がある。須恵器は混入と思われる。

SX1

SD1と重複し、切り合い関係からSD1より古い時期である。検出長約10mを測り、調査区北にまで続く。埋土は、灰褐色土(第10図第13層)の下位に堆積する灰褐色土(灰色土に鉄分と褐色土のブロックが混じった土、第10図第15層)である。出土遺物は、須恵器、中世陶器がある。

SD3

砂質の強い灰褐色土を埋土とするが、下層は鉄分の沈着による褐色が強いため基盤層との区別がつかめ



第15図　N区遺構平面図断面図　(1/100)

ず掘りすぎた。出土遺物はなかった。

ＳＫ１

西壁に接して検出した。規模は1.25m×1.10m以上、深さ40～55cmを測る。埋土は礫の多い灰褐色砂質土であった。出土遺物は須恵器、中世陶器がある。

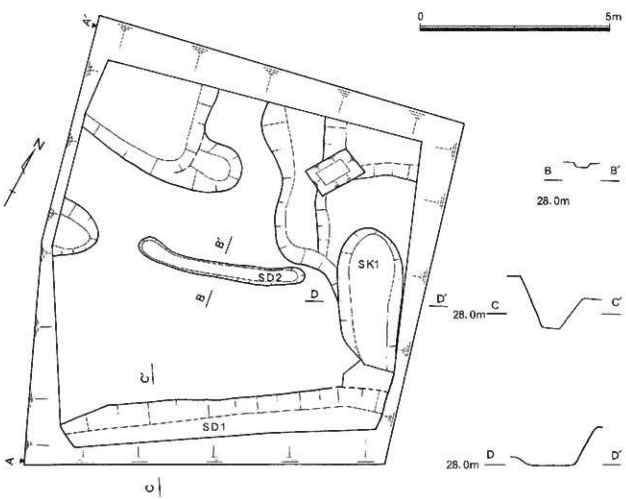
4. Ｏ区

ＳＤ１

調査区東壁に沿って検出した。検出長約8.5m、検出幅約1.0m、深さ約52～88cmを測る。東肩は検出できなかったが、南寄りの底部付近では東肩につながる壁を検出したので、推定の幅は1.7mほどであろう。溝底のレベルは、標高27.61～27.67mでほぼ平坦であった。埋土は、下位が灰褐色土と白黄色砂や黄褐色砂が混じった層、上位が灰褐色土(黄褐色と灰色の混じる土)であった。

ＳＤ２

調査区中央で検出した。長さ約4.5m、幅約40～50cm、深さ約14cmを測る。埋土は暗褐色砂である。



第16図　Ｏ区遺構平面図断面図　(1/100)

第4章　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、人工遺物として土師器、須恵器、陶器、磁器、土製品、木製品等、自然遺物として昆虫遺体、種子がある。総数はコンテナ箱に6箱分、土器・陶磁器の総破片数は2440点である。

調査区がL～O区と4箇所に分れているため、遺構同様に各調査区ごとに述べていく。また、法量・調整等は第3～7表の観察表に記した。(　)内の数字は実測図・写真図版の番号と一致する。型式名は、尾張系山茶碗は斎藤編年(参考文献11)と藤澤編年(参考文献22)、東濃系山茶碗は田口編年(参考文献14)、古瀬戸・大窯期陶器は藤澤編年(参考文献21、23、24)を用いた。

1．L区

ＳＥ1

東濃系山茶碗、古瀬戸後期の施釉陶器、常滑産の焼締陶器、中世土師器が主で、灰釉陶器、須恵器が少量含まれる。他に昆虫遺体がある。

東濃系山茶碗の碗(17-1)は、大畑大洞4号窯式、小皿(9-1-2)は脇之島3号窯式。尾張系山茶碗の碗(9-1-3)は、Ⅶ期第1型式、(9-1-4)は第Ⅶ期・第2型式。瀬戸産施釉陶器は古瀬戸後期のものが多いが、擂鉢(17-6)は大窯第1段階期である。擂鉢(9-3-1)は古瀬戸後Ⅳ期。擂鉢(20-2)は、ＳＥ2出土の破片と接合した。内面の摩滅が著しい。仏具(17-3)は二次被熱で釉がはがれている。さや(17-4)は施釉され、容器として使用したものである。甕(17-7)は常滑産で、第10型式。土師器(17-5)は内耳鍋で、半球型である。外面に煤が付着する。内面はヨコハケ調整を施す。時期は、15世紀末～16世紀前半と考えられる。

ＳＥ2

東濃系山茶碗、瀬戸産施釉陶器が主で、中世土師器、常滑産焼締陶器及び須恵器、古代以前の土師器は少量である。他に昆虫遺体がある。

東濃系山茶碗は大畑大洞4号窯式、大洞東1号窯式、脇之島3号窯式のものがある。天目茶碗(17-9、17-10)は、鉄釉がかかり削り高台である。(17-9)は古瀬戸後Ⅳ期、(17-10)は古瀬戸後期。底卸目皿(17-11)は、内外面に灰釉がかかる。古瀬戸前Ⅲ期～中期。桶(17-13)は古瀬戸後期。内耳鍋(9-5-4)は鎬釉。古瀬戸後期。(17-12)は、窯道具の蓋を転用したもので、二次被熱をうける。古瀬戸後期。さや(17-14)は古瀬戸。(9-6-3)は瀬戸産の鉄釉瓶類で、古瀬戸後期。(9-6-2)は土師器鍋で、半球タイプのもの。

Ｐ1

東濃系山茶碗の小片2点、須恵器の小片1点がある。

Ｐ4

須恵器の小片1点がある。

Ｐ5

須恵器の小片1点がある。

Ｐ6

東濃系山茶碗の小片2点、須恵器の小片1点がある。

P 8

東濃系山茶碗の小片7点、尾張系山茶碗の小片1点、瀬戸産陶器の小片5点がある。自然遺物として桃の種子1点がある。東濃系山茶碗の内2点は脇之島3号窯式。

P 9

東濃系山茶碗の小片1点、土師器鍋の小片1点がある。

P10

東濃系山茶碗の小片3点、尾張系山茶碗の小片1点、須恵器の小片1点がある。

P11

東濃系山茶碗の小皿(17-17)は、底部に墨書がある。大洞東1号窯式頃か。

P12

土師器の小片1点がある。

P13

(9-8-1)は折縁深皿のD縁部で、古瀬戸後Ⅲ期。(9-8-2)は東濃系山茶碗の小皿で、大洞東1号窯式。

P14

尾張系山茶碗の碗(17-16)は、高台がないタイプのものである。Ⅷ期第3型式より新しい。他に東濃系山茶碗、天目茶碗(古瀬戸後期)、鋳釉の鍋か釜、外面に煤が付着する土師器の鍋がある。

P15

東濃系山茶碗の小片4点がある。その内1点は、胎土に白色粘土が混じるもので生田2号窯式のもの。中世土師器の小片1点がある。

P16

東濃系山茶碗の小片2点がある。

P18

東濃系山茶碗の小片1点がある。

P19

折縁深皿は、古瀬戸中期。他に東濃系山茶碗の小片1点がある。

P20

東濃系山茶碗片6点(10-1-1～10-1-6)、瀬戸産丸碗片1点がある。山茶碗は、大畑大洞4号窯式、大洞東1号窯式のものがある。灰釉丸碗(10-1-7)は大窯第1段階期のものである。

P22

常滑産の甕片1点がある。

P23

瀬戸産大皿がある。時期は古瀬戸後期である。

P24

東濃系山茶碗8点、尾張系山茶碗1点、瀬戸産平碗1点、土師器皿2点がある。いずれも小片である。

P31

東濃系山茶碗、土師器鍋、須恵器があるが、いずれも小片である。

P34

東濃系山茶碗の小片1点、土師器の小片1点がある。

P35

東濃系山茶碗の小片1点がある。

P39

東濃系山茶碗の小片2点、中世土師器の小片1点、古代以前の土師器1点がある。

P40

須恵器の甕片1点がある。

P41

須恵器の甕片1点がある。

P43

東濃系山茶碗の小片1点、尾張系山茶碗の小片1点がある。

P47

12世紀代の尾張系山茶碗の小片1点がある。

P49

東濃系山茶碗の小片1点がある。

P50

東濃系山茶碗の小片3点(10-2-1、10-2-2)、瀬戸産擂鉢(10-2-5)、花瓶(10-2-4)、中世土師器(10-2-4)、東濃系灰釉陶器片がある。

P54

東濃系山茶碗片12点、瀬戸産施釉陶器片15点、常滑産甕片1点、中世土師器片2点がある。(10-3-1)は東濃系山茶碗の碗で生田2号窯式、(10-3-2)は脇之島3号窯式。(10-3-3、10-3-4)は折縁深皿で古瀬戸中期。(10-3-5)は四耳壺。(17-20)は大型袋物類の底部で、古瀬戸期。(10-3-7)は天目茶碗と小皿の融着したもの。10-3-6は水注の注口部で、二次被熱の可能性がある。なお近世磁器片が1点含まれていたが、調査時の混入と思われる。

P55

(10-4-1)は東濃系山茶碗の小皿で、大畑大洞4号窯式。(17-18)は尾張系山茶碗の小皿で、瀬戸第9型式期。(17-19)は東濃系の陶丸。(10-4-4)は山茶碗、(10-4-5)は須恵器である。

包含層

古代以前の土師器、古墳時代～奈良時代の須恵器、灰釉陶器、山茶碗(東濃系、尾張系)、古瀬戸期～大窯期の施釉陶器、中世土師器、近世～近代の陶磁器、砥石などがある。

古代以前の土師器は、甕口縁部や台付甕脚部の破片を除き、小片で器形や時期を特定できるものはない。須恵器は、壺、甕類の体部片が大半を占める。時期の明らかなものは少なく、東山61号窯式頃の坏身、坏蓋、高坏、堤瓶、硯、甕など6～8世紀代のものがある。灰釉陶器も小片で時期は不明である。

12世紀代から15世紀代の陶器は、器形の種類も豊富で、量的にも多い。

東濃系山茶碗は、西坂1号窯式の可能性のある小皿1点を除き、丸石3号窯式から窯洞1号窯式、白土

原1号窯式(17-21、18-1)、明和1号窯式(17-22、18-16)、大畑大洞4号窯式(17-23、18-3～18-6、18-8、18-9、18-17、10-8-4)、大洞東1号窯式(18-7、18-10～18-12、18-18、18-20、18-21)、臨之島3号窯式(18-13～18-15、18-19)、生田2号窯式までの碗、小皿がある。他に鉢がある。

尾張系山茶碗は、第Ⅶ期・第1型式(18-24、18-25)から第Ⅶ期・第2型式、第Ⅶ期・第3型式、第Ⅷ期・第1型式(18-27、18-28)、第Ⅷ期・第2型式(18-29)、第Ⅷ期・第3型式までの碗、小皿がある。他に鉢がある。(18-30、18-31)は、尾張系山茶碗の中でも瀬戸窯南部に推定できるので、藤澤編年第8型式か第9型式と思われる。

施釉陶器は、天目茶碗、丸碗、平碗(18-33、18-34)、緑釉皿(19-1)、卸皿(19-7)。折縁深皿(19-17～、19-21)、端反皿(18-35)、直縁大皿、重圏皿(19-2)、大平鉢(19-16)、播鉢(20-1、20-3～20-5、20-7)、四耳壺、瓶子、祖母懐壺(19-6)、鍋釜類、内耳鍋、仏餉具(19-4)、仏花瓶(19-5)、火舎(19-12)、さや(20-8、20-9)などがある。(19-3)の器形名は不明である。時期の明らかになったものは、(19-5、19-20、19-21)は古瀬戸中期。(19-22)は古瀬戸中期または後1期。(20-3)は古瀬戸後Ⅲ期。(19-1)は古瀬戸後Ⅲ期またはⅣ期。(18-35、19-4)は、古瀬戸後期。(20-1)は古瀬戸後Ⅳ期または大窯第1段階期。(20-7)は古瀬戸後Ⅳ期。(19-2)は大窯期。(20-5)は大窯第1段階期、(20-4)は大窯第2段階期である。

常滑産焼締陶器は、甕の体部片がある。口縁部片は6A型式のものである。赤物は1点のみで、他は黒灰色のものである。

土師器は皿、鍋、羽釜などがある。いずれも小片である。

他に、陶丸(18-32)、土錘(20-17～19)がある。(20-17)は17.0gを量る。

2. M区

ＳＫ１

(13-2-2)は折縁深皿で、古瀬戸後Ⅰ期。東濃系山茶碗の小片４点がある。

ＳＫ２

中皿(21-1)は、口縁部は欠けているが折縁中皿と思われる。底部に糸切痕が残る。中国陶磁(21-2)は青磁小碗の底部片である。見込に蓮弁模様が施されている。産地は龍泉窯系のものである。時期は15世紀代と思われる。他に東濃系山茶碗の小片10点、尾張系山茶碗の小片１点、常滑産の甕片４点がある。

ＳＫ３

東濃系山茶碗片２点、尾張系山茶碗片１点がある。いずれも小片である。

包含層

東濃系山茶碗片４点、尾張系山茶碗片１点がある。いずれも小片である。

3. N区

ＳＤ１

須恵器の小片２点がある。(21-3)は土錘である。重さ17.2ｇを量る。

ＳＤ２

弥生土器または土師器の小片(13-5)がある。黒斑が付く。内外面にヘラミガキ調整する。

ＳＫ１

東濃系山茶碗の小片(13-6)１点がある。脇之島３号窯式。他に須恵器片１点がある。

ＳＸ１

古代以前の土師器片３点、須恵器片６点、東濃系山茶碗片２点(13-7)がある。

包含層

須恵器、中世陶器、近世陶器の小片がある。東濃系山茶碗は、白上原１号窯式、明和１号窯式(21-4)、大畑大洞４号窯式、大洞東１号窯式、脇之島３号窯式、尾張系山茶碗は第Ⅶ期・第１型式(21-5)、第Ⅶ期・第２型式、施釉陶器は古瀬戸後期の直縁大皿(21-6)、擂鉢、四耳壺の破片がある。

4. O区

ＳＤ１

須恵器、灰釉陶器、山茶碗(東濃系、尾張系)、施釉陶器、土師器がある。尾張系山茶碗は、碗口縁部片で、時期は明らかでない。東濃系山茶碗は、細片であるが大畑大洞４号窯式のものと思われる。施釉陶器は平碗の小片である。須恵器は、甕、高坏、平瓶(21-10)、坏(21-7)、長頸瓶(21-9)、袋物(瓶類等)(21-8)、袋物？(21-11)などがある。古墳時代から奈良時代のものである。

ＳＫ１

東濃系山茶碗の碗の小片１点がある。

包含層

須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗(東濃系、尾張系)、常滑産焼締陶器、近世陶器がある。須恵器は、

提瓶、盤、無蓋坏、平瓶などがある。いずれも小片である。6世紀から8世紀代の時期のものである。東濃系山茶碗は、窯洞1号窯式、白土原1号窯式、明和1号窯式(21-12、21-15)、大畑大洞4号窯式(21-13、21-14、21-17～21-19)、大洞東1号窯式の碗、小皿がある。小皿(21-16)は、明和1号窯式か大洞大畑4号窯式のものと思われる。尾張系山茶碗は、第Ⅶ期第1型式(21-20)、第Ⅷ期第3型式、第Ⅷ期第1型式(21-21)の碗がある。施釉陶器は壷類、御皿(21-22)、擂鉢などがある。古瀬戸中期から大窯第1段階期のものである。

5．自然遺物－井戸中より発見された昆虫について

（1）昆虫標本の同定

名古屋市守山区天白元屋敷遺跡の室町時代の2基の井戸(SE01、SE02)中から発見された2点の昆虫について、同定・分析する機会を得たので、以下にその概要を報告する。

〈標本1〉SE01産出（写真1）

右鞘翅（上半分が一部欠損している）。長さ8.8㎜、幅4.2㎜。淡緑色。鞘翅には10～12本程度の点刻列が認められるが、顕著な隆条は見られない。なお、本標本の右側縁には、乾燥・収縮の過程で生じたと推定される変形やしわが多数認められる。

〈標本2〉SE01産出（写真2）

右鞘翅（翅端部が欠損している）。長さ7.9㎜、幅4.4㎜。緑色ないし暗緑色。鞘翅には標本1同様10～12本の点刻列を有し、顕著な隆条は認められない。

標本1および2とも、同一分類群に属する鞘翅である。形態・色彩などの特徴から、(COLEOPTERA)・コガネムシ上科（SCABAEOIDEA）・コガネムシ科（SCARABAEIDAE）・スジコガネ亜科（Rutelinae）に属する昆虫に分類される。また、鞘翅に明瞭な隆条が認められないことなどより、近縁のコガネムシ属(*Mimela* 属)と識別される。このため、スジコガネ亜科・サクラコガネ属(*Anomala* 属)に所属する昆虫であることがわかる。

鞘翅目　COLEOPTERA
コガネムシ上科　SCABAEOIDEA
コガネムシ科　SCARABAEIDAE
スジコガネ亜科　Rutelinae
サクラコガネ属 *Anomala*

サクラコガネ属は日本に合計20種生息しているが、地理的分布から考えエサキドウガネ・リュウキュウドウガネ・オオシマドウガネ・ムシスジコガネ・ニイジマスジコガネ・サンカクスジコガネ・ヤノスジコガネ・キベリアオドウガネ・リュウキュウスジコガネの9種は、いずれも琉球列島を中心とした亜熱帯地域に生息するものであることから除外される。

次に鞘翅の大きさおよびその色彩などから、ヤマトアオドウガネ、アオドウガネ・ドウガネブイブイ・サクラコガネの4種は、本標本よりかなり大きく、色・表面の彫刻等の特徴も合致しない。また、チビサクラコガネ・ヒラタアオコガネの2種は体サイズが小さく、鞘翅の大きさでもほとんど重なることがない。

残る5種のうち、ツヤコガネ・ハンノヒメコガネ・オオサカスジコガネの3種は本標本と鞘翅の色および光沢を異にする。ヒメサクラコガネについては、現生標本を用い比較・検討してみると、本標本に認められる3つの特徴(全面に緑色光沢を有し不規則な円形の10～12本の点刻列をよそおう。微小点刻が膨隆した間室内に認められる、鞘翅全面に微細な網目状印刻を有する)により識別が可能である。以上を総合し、本標本はサクラコガネ属20種中のヒメコガネ(*Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY)と同定される。

（2）分布および生態・古環境

ヒメコガネは琉球を除く日本全土に分布し、マメ科植物を中心に多くの草本類および樹木の葉を食する

広食性の食葉性昆虫である。幼虫時代には主にこれらの根を害する。人間生活との関連では、カキ・ブドウ・クリなどの果樹、および桑・大豆などの葉を食害することから、古くより「農林有害昆虫」に指定され、とくに畑作物の害虫として著名である。近年、農薬の普及もあってヒメコガネによる栽培植物の被害は減少したものの、林縁などに生えるクズ等の葉を食し本種はその個体数を維持しているとされる。

遺跡からの情報では、本種は縄文時代前期の地層中よりすでに見いだされている(森、1995a)が、縄文時代から古代の頃までは産出例が少なく、中世以降個体数が急増したことが日本各地の遺跡産昆虫の分析結果により明らかになってきた(森、1994；森、1995b)。このことは、中世の頃に開始された人間による森林伐採に伴う二次林の増加、畑地や人家の周囲に植栽された畑作物・果樹等の存在など、集落を取りまく植生が大きく変化したことに起因しており、本種はこのような人の介在した植生を示唆する人里昆虫の指標種(森、1995a)である。

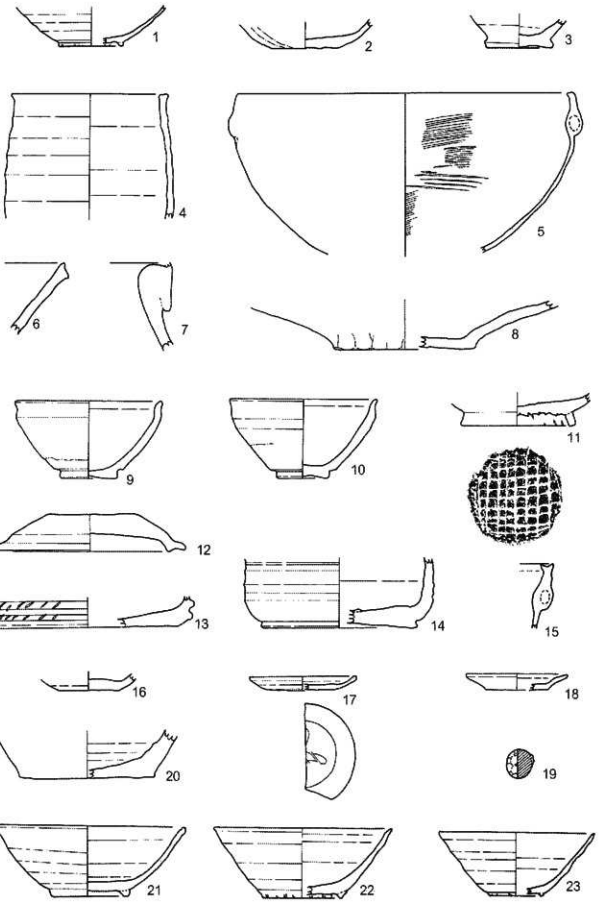
天白元屋敷遺跡跡の井戸中より人里昆虫である食葉性のヒメコガネが発見されたことから、本遺跡周辺は開発が進んだ植生空間であったことが推定され、また井戸の付近には果樹や畑作物などの有用植物が植栽されていた可能性が考えられる。

文　献

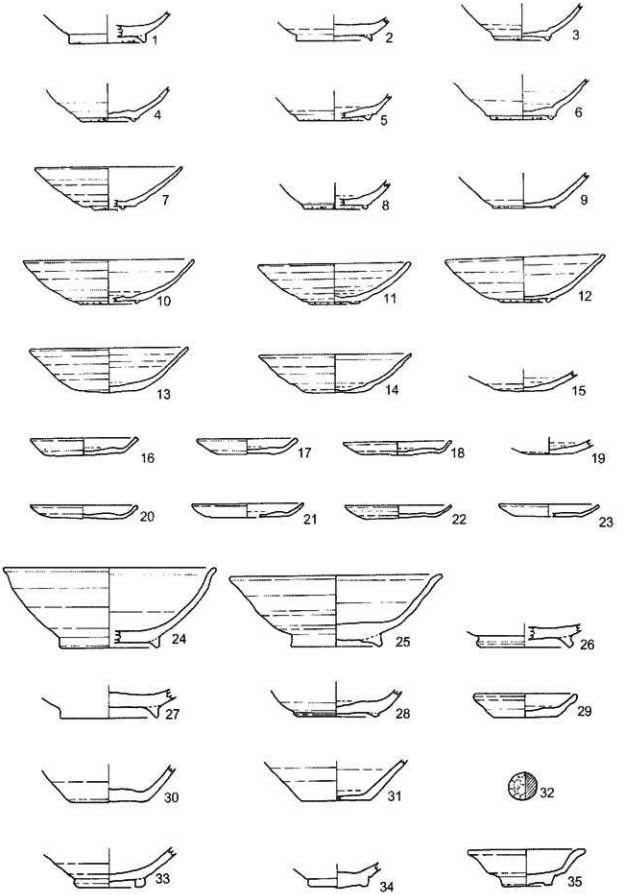
森　勇一（1994）　昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷の復元．第四紀研究，33（5），331-349.

森　勇一（1995a）　人里昆虫が語る人工の森－昆虫にみる三内丸山遺跡の謎－．縄文文化の発見．PHP研究所，154-181.

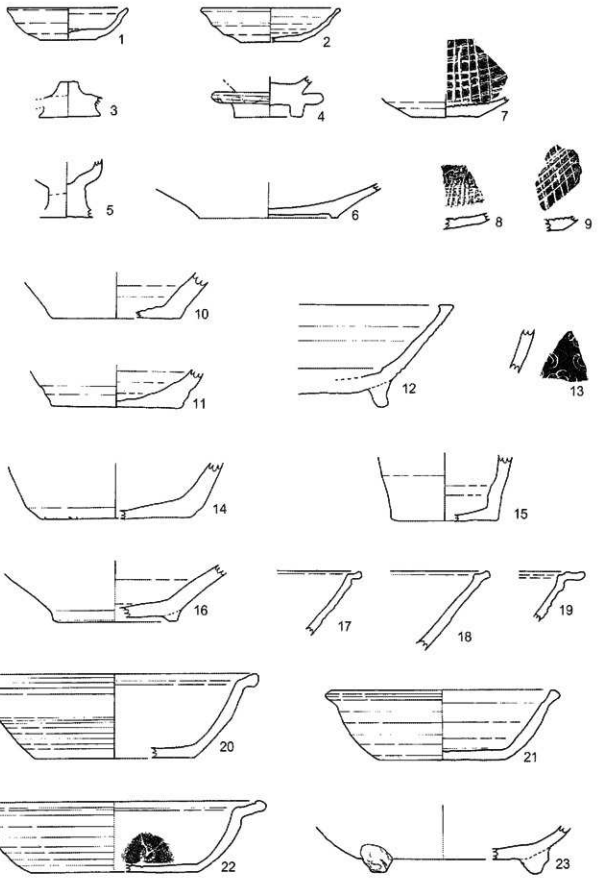
森　勇一（1995b）　虫は世につれ、人につれ、昆虫考古学のすすめ（4），考古学フォーラム6，愛知考古学談話会，53-61.



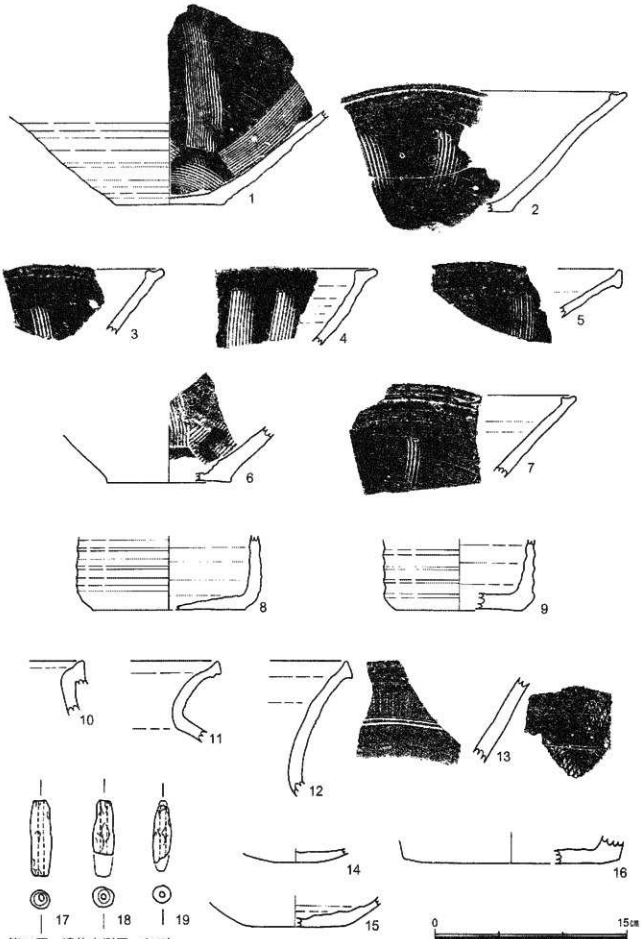
第17図　遺物実測図　(1/3・8のみ1/6)



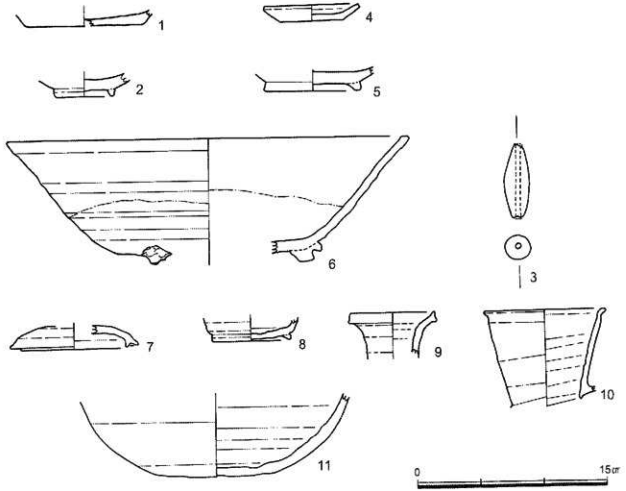
第18図　遺物実測図　(1/3)



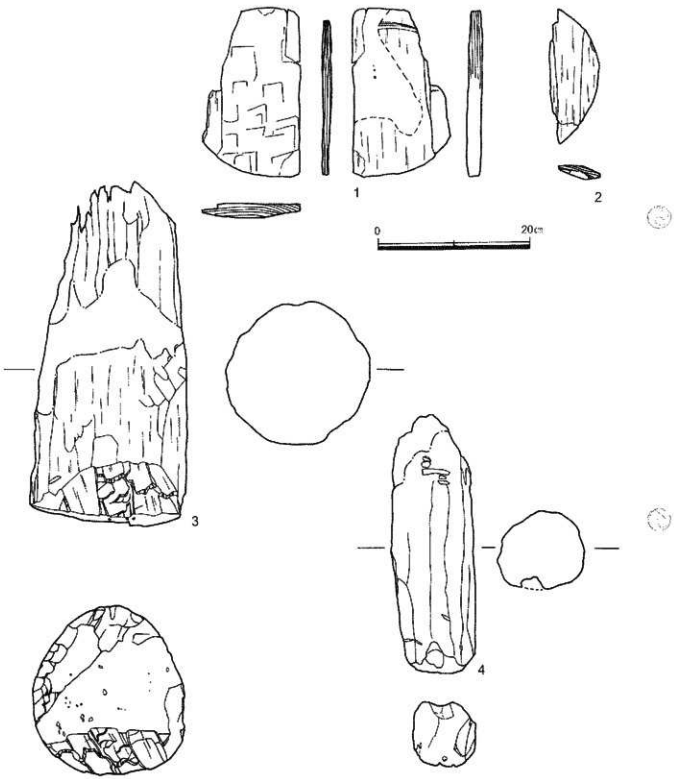
第19図　遺物実測図　(1/3)



第20図　遺物実測図　(1/3)



第21図　遺物実測図　(1/3)



第22図　遺物実測図　(1/5)

第5章　まとめ

1. 出土遺物の特色ー出土土器・陶磁器の量的分析について

天白元屋敷遺跡第3次発掘調査で出土した遺物の大半は、土器・陶磁器類で、総出土量(接合前破片数)は2,440点である。しかし、この2,440点のうち遺構から出土しているのは僅か19.7%に過ぎず、残りの80%以上は遺物包含層や表土(耕土)層からの出土である。しかも遺物包含層の出土遺物には弥生土器から中世陶器までが含まれており、一見して多時期の遺物が混在していることが明らかである。一般的に、このような一括性の低い遺物については、資料性に乏しいとして、あまりかえりみられてはいない。しかし、もしこうした資料をかえりみる必要がないのであれば、現在、原則的に発掘調査によって出土している遺物をすべて持ち帰り、資料として保管していること自体が無意味となってしまう。

多くの埋蔵文化財を抱える自治体にとって、収蔵庫の不足が既に日常的な悩みとすらなっている状況下にあって、なおかつ総体的な遺物の保管を主張するためには、その理由が具体的に示される必要があろう。こうした観点から、一括性の低いとされる遺物についても、遺物が群として持つ情報の操作を通して、歴史資料として活用されうる可能性については既に述べたことがある(注1)。ここでは同様の視点から天白元屋敷遺跡第3次発掘調査出土遺物の量的分析を試みてみることとする。

前提として、検討の対象とする遺物を土器・陶磁器に限定する。土器・陶磁器に限定する理由は、木製品や金属製品のように環境によって遺存率が変化しないため、他遺跡との比較に好都合だからである。また、統計的データは一般的に情報量が多ければ多いほど信頼度が高いが、今次調査での出土土器・陶磁器総量は4調査区分を合算しても2,500点に満たない。したがって調査区ごとに分けた場合、データの信頼度が大きく低下するおそれがあるが、4調査区は相互には30m程度しか離れておらず、地点ごとに遺跡の性格が極端に異なる可能性は低いと思われるので、ここでは土器・陶磁器を出土調査区に関わりなく一括して取り扱うこととする。また、データは基本的に破片数(接合前)で示している。

出土土器・陶磁器2,440点の内訳は、以下のとおりである。

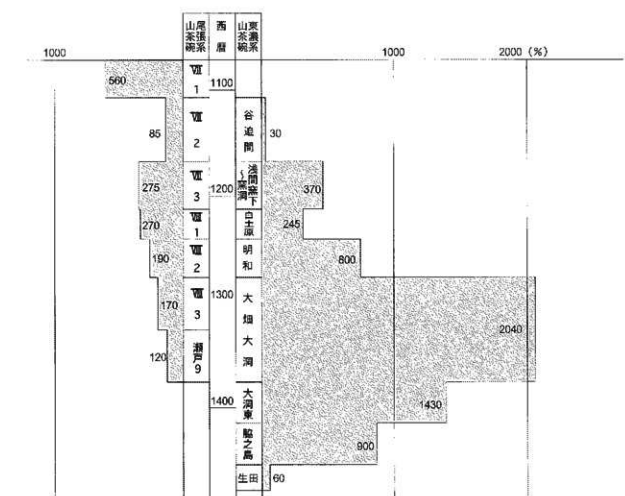
(内訳) 弥生土器・古代以前の土師器 …… 51
須　恵　器（古代）……280
灰 釉 陶 器（古代）…… 23
中 世 陶 器　山茶碗……1,299
瀬戸 …… 551
常滑 …… 74
中世土師器　皿 ……39
鍋・釜 …… 58
中 国 磁 器（中世）青磁…… 1
白磁……1
近世陶磁器 ……58
近世土師器 …… 1
不明 …… 4

さて、一括して取り扱うといっても、前述のように出土土器・陶磁器には多時期のものが混在しているから、これをそのまま他遺跡と比較してもあまり意味はない。このため、ある程度限定された時期の土器・陶磁器量を推定復元する必要がある。

総出土点数2,440点の所属時期を古代以前・中世・近世の3時期に大別すると、古代以前354点・中世2,023点・近世59点・不明4点となり、大半が中世のものであることが判る。しかし、一口に中世といっても、実際には数世紀にわたっており、これを一概に論ずるのは適当ではないだろう。そこで、次に中世における調査地点の盛衰を出土遺物から考えてみよう。

東海地方の代表的中世食器である山茶碗(碗・小碗・小皿)について、時期別の出土量(底部の延べ残存率)を示したものが第23図である(個々の資料の計測にあたっては、5%を単位とし、2.5%未満は切り捨て、2.5%以上は切り上げた。また、出土量を底部の延べ残存率で示しているのは、山茶碗の場合、口縁部や体部よりも底部の方が時期判定をしやすいからである)。この図から、東濃窯明和1号窯式の段階(暦年代で13世紀第3四半期頃)から山茶碗の量が飛躍的に増大しており、調査地点の盛期がこの時期以降にあることが見て取れよう。

さて問題は、いかにしてこの時期の遺物を抽出するかである。出土中世土器・陶磁器2,023点のそれぞれについて、時期同定が可能であれば何ら問題はないが、現実には胴部の小破片で細かい時期決定すること



第23図　天白元屋敷遺跡第3次調査出土山茶碗(碗・皿)時期別底部延べ残存率図

は殆んど不可能である。このため、ここでは時期比定の容易な底部もしくは口縁部の延べ残存率の比率から該当時期の土器・陶磁器量を推定する。

具体的に例を示そう。東濃系山茶碗の場合、碗の底部の延べ残存率は4,070%で、時期別内訳の内訳を示せば、明和1号窯式以降が3,425%、それより古いもの550%、時期不明95%である。つまり、時期の判るものでは3,425÷(4,070−95)×100で、約86.2%が明和1号窯式以降ということになるので、碗の総破片数1,027にこれを乗じて、小数点以下第1位を四捨五入した数値、885を該当時期の東濃系山茶碗(碗)の破片数とみなす。

尾張系山茶碗・瀬戸・常滑については、東濃窯明和1号窯式が猿投窯の第Ⅶ期第2型式、瀬戸窯(古瀬戸)の前Ⅱc～Ⅲ期、常滑窯の第6型式にほぼ並行すると考えられている(注2)ので、同様の操作によって該当時期の破片数の推定が可能である。

残るのは中世土師器と中国磁器であるが、このうち中世土師器の皿については、製作手法が判るものはすべて、大皿(口径12～13cm前後)がロクロ成形、中皿(口径8cm前後)が非ロクロ成形で外面一面に指頭圧痕が残るものである。こうした土師器皿の様相は、名古屋城三の丸遺跡などで後期の古瀬戸(暦年代で14世紀後半～15世紀頃)に伴っているもの(注2)と共通するあり方である。また、中世土師器の鍋・釜は、全体の形状が半球形で内耳を持ついわゆる尾張型鍋と、口縁部が強く内傾し胴部に最大径のある羽釜の2種がある。前者は阿弥陀寺遺跡などで13世紀中葉以降の山茶碗と、後者は清洲城下町遺跡や名古屋城三の丸遺跡などで15世紀後半以降の陶磁器と共伴していることが知られている。最後に中国磁器であるが、白磁は12世紀、青磁は15世紀頃のものと考えられる。したがって、中世土師器については皿および鍋・釜のすべて、中国磁器については青磁1点を該当時期のものとみなすことができる。

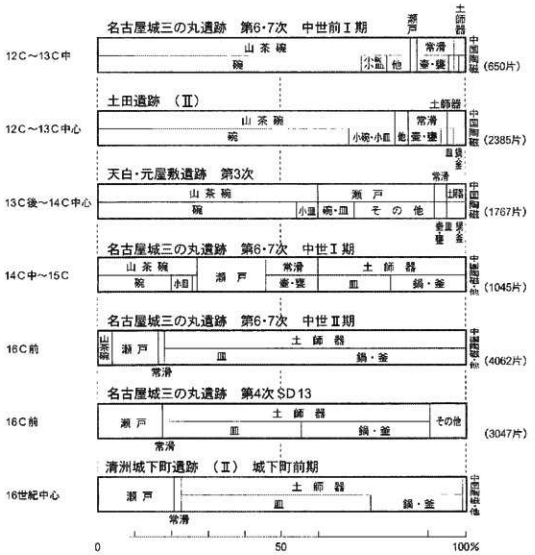
以上の操作から推定される東濃窯明和1号窯式の段階以降、すなわち13世紀後半以降の中世土器・陶磁器の破片数は1,767点で、内訳は下記のとおりである。

(内訳) 中世陶器 山茶碗(碗)……922
山茶碗(小皿)…… 118
山茶碗(鉢)…… 4
瀬戸 …… 551
常滑(壺・甕) ……74
中世土師器 皿 …… 39
鍋・釜……58
中国磁器 青磁 ……1

このデータを元に土器・陶磁器の組成を100分比で示し、尾張地域の他遺跡と比較してみたのが第24図である(注3)。名古屋城三の丸遺跡第6・7次の中世Ⅰ・Ⅱ期、および清洲城下町遺跡Ⅱの城下町前期についてはそれぞれ該当時期の遺構から出土している土器・陶磁器の合計を比較データとした。ただし、名古屋城三の丸遺跡第6・7次の中世Ⅰ期については、土坑墓出土遺物を除外している。また、名古屋城三の丸遺跡第6・7次の中世前Ⅰ期分については、報告書記載の数値と異なっているが、これは尾張系山茶

碗と東濃系山茶碗の編年の並行関係について見直しがなされたため、これに合わせて再度算出を行なった結果によるものである。

この図から、尾張においては時代が降るにつれて山茶碗の比率が低下していることが読み取れ、天白元屋敷遺跡については12世紀～13世紀と14世紀中葉～15世紀の中世遺跡の中間的様相を示していることが判る。このことは、第23図に示したグラフから遺跡の盛期が13世紀後半～14世紀を中心とする時期と推定されることとも矛盾しない。若干問題があるとすれば、山茶碗が激減し遺跡が衰退しているようにみえる東濃系山茶碗生田２号窯式は、山茶碗生産自体が衰退に向かう時期であることである。天白元屋敷遺跡から出土している中世土器・陶磁器には、瀬戸・美濃大窯第２段階(1520～1555年頃)までのものが含まれているから、第23図のグラフは窯場における山茶碗生産量の減少を反映しているに過ぎず、遺跡自体は16世紀前半まで継続しているとも考えられる。しかし出土した瀬戸・美濃554片のうち、窖窯製品(古瀬戸)と推定されるものは357片もあるのに対して、大窯製品と推定されるものは僅か19片に過ぎない(残り175片は判定不能)。したがって、大窯期(1485年～)には遺跡は既に衰退期に入っていると考えられ、第23



第24図　尾張地域の中世遺跡出土土器・陶磁器比率の比較図

図のグラフで示された時期別の山茶碗量の増減は、ほぼ遺跡自体の盛衰を表わしているとみて差し支えなかろう。

さて、時代が降るにつれて山茶碗の比率が低下していることは既に指摘したが、12～13世紀の遺跡と較べると、13世紀後半～14世紀を中心とする天白元屋敷遺跡では常滑・土師器・中国陶磁の比率は殆んど変わらず、山茶碗の比率が約2割減少した分、瀬戸の比率が増加している。一見すると、山茶碗の供膳具(碗・皿)が施釉陶器である瀬戸の供膳具に取って替わられつつあるようにもみえる。しかし、食膳具と考えられる瀬戸の碗類や中・小皿類は、天白元屋敷遺跡においては全体の1割弱に過ぎず、山茶碗比率の低下の半分しか説明できない。

では、残り約1割分の変化は何に起因しているのであろうか。現時点では裏付となる数量的データの収集が不十分であるが、あえて見通しを述べておくと、一つの要因として、卸皿などの調理具器種の量産化を挙げておきたい。瀬戸における卸皿の生産は13世紀前半まで遡ると考えられているが、量産化されるようになるのは13世紀後半からであり、これは山茶碗の比率の低下時期と一致している。また、山茶碗(碗・皿)については、その器形から供膳具と考えられがちであるが、しばしば指摘されているように、内面に顕著な磨耗がみられるものが少なくなく、調理具としても用いられていた可能性が極めて高い。例えば、名古屋城三の丸遺跡第6・7次調査(中世前Ⅰ期)の場合、約2割にこうした磨耗が認められ、山茶碗が供膳具以外に用いられることが、かなり頻繁にあったことが判る。ただし、内面の磨耗は、一般に尾張系山茶碗と較べて東濃系山茶碗では目立たない。これは、産地・材質の違いに起因している可能性もないではないが、尾張地域においては13世紀後半を境として尾張系山茶碗が減少し、東濃系山茶碗が増加する傾向があることから、時期的な相違であることも充分に考えられる。そうだとすると、山茶碗内面の磨耗の減少と、卸皿の量産化とがほぼ時期的に一致することになるから、この時期の山茶碗比率の低下は、調理具としての山茶碗が卸皿などの調理具器種に取って替わられてゆく状況を示しているとみることができるのではなかろうか。

注1　尾野善裕「玉の井遺跡発掘調査報告　Ⅴ 考察　2 中世 a 中世遺物分析の方法」『石神遺跡・玉の井遺跡・高蔵遺跡(第7次)発掘調査報告書』　名古屋市教育委員会　1995

注2　尾張系山茶碗と東濃系山茶碗の並行関係については、藤沢良祐「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第3号　1994による。

注3　天白元屋敷遺跡以外のデータについては、基本的に以下の報告書によっている。

城ケ谷和広ほか『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第23集　土田遺跡Ⅱ』　財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1991

小澤一弘ほか『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第27集　清洲城下町遺跡(Ⅱ)』　財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1992

水野裕之ほか『名古屋城三の丸遺跡第4・5次発掘調査―遺物編―』　名古屋市教育委員会　1994

尾野善裕ほか『名古屋城三の丸遺跡第6・7次発掘調査報告書』　名古屋市教育委員会　1995

2. 各調査区の成果

今回の調査は、第1次、第2次調査と同様に遺跡の範囲、性格を確認することを目的として実施した。前回までと異なり、比較的近接した4地点に調査区を設定した。各調査区ごとの成果を述べてまとめとしたい。

L区

遺跡推定範囲ラインにかかる東端に設定した。4地点中、当初は微高地から最も離れていたため、遺構遺物は希薄と推測したが、結果は最も良好な包含層及び遺構を検出した。遺物は、遺構出土分も含めて、古代以前の土師器、須恵器、灰釉陶器、中世陶器、中世土師器、近世～近代の陶磁器など破片総数2,117点が出土した。これは、今回の出土破片総数2,440点の約87%を占める。

包含層は、層厚30～50cmをもつ灰褐色砂質土で近世以降の遺物を含まず、中世の良好な包含層である。これまでの調査地点で近似した状況を呈していた包含層は、G区の第Ⅳ層(灰褐色シルト質土)である。層厚40～60cmで、中世の良好な包含層である。L区とは北東へ110m離れた位置にあり、中世包含層が遺跡推定範囲からより東方へ広範囲に広がっていることが確実となった。

G区は、灰青色シルト質土が基盤層で遺構は皆無であった。これに対してL区では白灰色砂、または青灰色砂を基盤とし、井戸、柱穴などの遺構を検出した。井戸は、J区で検出した井戸と同様、河原石を組んで作られていたが、桶はなく底は砂地のままであった。時期は、遺物から大窯第1段階期に埋没している。SE1、SE2から出土した擂鉢が接合したことにより、同時期に存在していたことが明らかになった。冬場の調査であるため、水位は低下しているものの検出面までは常に湧水する状況にあり、簡易な作りではあるが、十分に機能していたものと思われる。野田真代志氏の話によれば、このあたりの水田は道称イドノモトと言うそうである。井戸を作るのに適した土地だったのであろう。

柱穴・小穴は、56基検出した。この内13基の穴に木柱が遺存していた。直径8～18cmほどの木を使用していた。また、掘りかたをもたないで直接突き刺した杭木も6本あった。木は底部には加工痕がみられ、また腐朽しないように焼かれ炭化していた。建物、柵などの建築材と考えられるが、調査区の制約もありはっきりとしなかった。柱穴・小穴の時期は、遺物が少なくはっきりとしない。ただし、大畑大洞4号窯式期(P55)、大洞東1号窯式期(P11、P13)、脇之島3号窯式期(P8)、生出2号窯式期(P15、P54)、大窯第1段階期(P20)の遺物を含む7基があり、また包含層中の遺物は、大窯第2段階期までの遺物までのものがある。これらのことから、柱穴・小穴の多くは13世紀末～16世紀前半に形成されたと推定したい。

また、調査区南壁面際で検出された柱穴は、包含層途中、標高28.48mから掘り込まれていた。他の柱穴も包含層上面または上位層から掘り込まれたと推定されるので、14～16世紀前半の生活面の標高は28.3～28.5mあたりと推定される。このレベルは、A区の基盤層(Ⅲ層)上位、B区の基盤層(Ⅲ層)上位、E区のⅢ層上位と同じ高さである。周囲は水田であるため、一見低湿地で生活していたと思いがちであるが、14～16世紀前半には、微高地上に生活面があったといえるだろう。

井戸内から出土した昆虫遺体は、わずか2点であったが、ヒメコガネと鑑定された(第4章5参照)。森勇一氏によれば、二次林や人間の植栽した畑作物、果樹等の葉を食する広食性の食葉性昆虫とのことである。このことから推測すれば、森林の中に民家が点在するというよりは、樹木の伐採や自然改変が進んだ村落

景観であったのであろう。

M区

M区は、遺構はわずか3基の土坑を検出したに留まり、遺物は破片総数83点で全体のわずか約3.0%である。東側ですぐ脇を農道が通るが、一段高くなっている。農道の東は農場敷地であるが、開墾の際中世～近代の遺物が出土していることから、包含層の大半は削平されたものと思われる。

N区

N区は、基盤層の標高が南端で27.9～28.0m、北端で28.3mを測り、M区では北端で28.6m、南端で28.3mを測る。このことから、基盤層は北から南に緩やかに下がる地形をなしている。N区南壁際では人頭大の河原石を含む砂礫層が60cmほどの厚さで堆積していた。南東端で検出した中世包含層とは直接接していないため、堆積の前後関係は明らかにできなかった。中世包含層は、灰褐色土でL区で検出した包含層と同一のものであった。この付近から東方に向かって堆積されていることが明らかになった。

ＳＤ２は、包含層・ＳＸ１を切って作られていた。溝底のレベルは南に下がることから、排水路的な機能があったものと思われる。N区の出土遺物は、総破片数70点で全体の約3.0%であった。

O区

O区では、ＳＤ１が検出された。推定される幅約1.7m、深さ50～90cmの断面形が逆台形を呈した、しっかりした溝である。検出長が短いため、その機能は今後の課題である。M区の出土遺物は、総破片数170点で全体の約7.0%であった。

参考文献

1　愛知県教育委員会編　1994『愛知県遺跡地図(Ⅰ)尾張地区』

2　愛知県防災会議地震部会編　1980『愛知県の地質・地盤(その1)「地形・地質・地盤の概況」』

3　愛知県守山市役所編　1963『守山市史』

4　赤羽一郎・中野晴久　1994「生産地における編年について」『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所

5　犬塚康博　1986「古代の志段味に関する覚え書き」『名古屋市博物館 研究紀要第9巻』

6　遠藤才文　1991「小幡城」『愛知県中世城館調査報告Ⅰ』愛知県教育委員会

7　梶山勝　1986「名古屋市守山区上志段味出土の鍋剣について」『名古屋市博物館 研究紀要第9巻』

8　梶山勝　1983「春日井市高蔵寺瓦窯の再検討」『名古屋市博物館 研究紀要第6巻』

9　川合剛・安達厚三　1979「名古屋市守山区樹木遺跡の石器」『名古屋市博物館 研究紀要第3巻』

10　川合剛・安達厚三　1992「春日井市上八田町遺跡採集の旧石器」『名古屋市博物館 研究紀要第15巻』

11　斎藤孝正　1988「中世猿投窯の研究－編年に関する考察－」『名古屋大学文学部 研究論集ＣⅠ(史学34)』

12　佐原眞・春成秀爾　1982「銅鐸出土地名表」『考古学ジャーナルNo. 210』

13　志段味地区自然環境調査会　1984『名古屋市守山区　志段味地区自然環境調査報告書』名古屋市教育委員会

14　田口正二　1983『考古学ライブラリー17　美濃焼』ニューサイエンス社

15　竹内理三編　1989『角川地名大辞典23　愛知県』株式会社角川書店

16　名古屋市博物館編　1984『守山の遺跡と遺物』

17　名古屋市見晴台考古資料館編　1985『天白・元屋敷遺跡発掘調査報告書』名古屋市教育委員会

18　名古屋市見晴台考古資料館編　1986『天白・元屋敷遺跡第二次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会

19　名古屋市見晴台考古資料館編　1995『名古屋城三の丸遺跡第6次・第7次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会

20　日本の地質『中部地方Ⅱ』編集委員会編　1988『日本の地質5　中部地方Ⅱ』共立出版株式会社

21　藤澤良祐　1984「“古瀬戸”概説」『美濃陶磁歴史館報Ⅲ』

22　藤澤良祐　1982「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅰ』

23　藤澤良祐　1991「瀬戸古窯址群－古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅹ』

24　藤澤良祐　1991「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」『中世の城と考古学』新人物往来社

遺構名	規模（直径又は検出長）	深　さ	備　　考
P１	20×20	30.2	
P２	83×75	17.7	
P３	50×50	21.0	
P４	70×50	14.7	
P５	70×90		
P６	80×60		
P７	60×(35)	10.8	
P８	165×110	19.9	
P９	75×72	21.9	
P１０	70×60	15.4	柱径12
P１１	90×90、65×40	19.3	柱径13、柱径5、石
P１２	90×90、55×55	14.3、12.9	柱径14
P１３北	60×50	13.1	柱径15、柱径5
P１３南	44×32	9.6	柱径15
P１４	60×60	26.8	柱径11×12
P１５	77×50、50×35	4.1、16.8	
P１６	65×50	6.8	柱径8、柱径10
P１７	72×49	11.3	
P１８	60×48	12.8	
P１９	20×20	21.8	
P２０	46×64	19.3	
P２１	34×34	18.2	
P２２	70×37	22.1	柱径18
P２３	18×18	16.9	
P２４	115×100	47.0	
P２５	36×35	19.0	石20×15
P２６	24×30	7.1	
P２７	66×67	9.1	
P２８	60×(30)	13.7	
P２９	60×45	19.5	
P３０	30×27	16.4	
P３１	50×26	12.6	
P３２	97×37	10.2	石
P３３	136×45	7.3	
P３４東	40×46	19.4	
P３４西	35×30	16.0	
P３５	40×47、38×34	11.4、6.1	
P３６	43×41	18.6	
P３７	61×56	36.7	
P３８	45×51	16	
P３９	37×43	26.1	

遺構名	規模（直径又は検出長）	深　さ	備　　考
P４０	46×45、30×35	26.0、13.8	
P４１	46×37	15.6	
P４２	30×45	11.1	
P４３	60×60	42.9	
P４４	35×35	19.8	
P４５	33×37	18.7	
P４６	29×27	19.7	
P４７	38×33	19.7	
P４８	27×33	11.7	
P４９	40×40	17.8	石
P５０	38×42	28.9	
P５１	108×94	16.7	
P５２	42×54	10.2	柱径10
P５３	41×42	15.7	柱径14
P５４	130×(50)	11.4	
P５５	46×51	18.7	
P５６	26×24	10.3	
杭１	12×12		
杭２	6.0×4.0		
杭３	17×(　)		
杭４	12×10		
杭５	10×15		
杭６	16×16		
焼石	一辺18		
石	25×24		
ＳＥ１	70×70	50.0	河原石積み
ＳＥ２	80×85	75.0	河原石積み
ＳＫ１	(100)×(85)	14.0	M区
ＳＫ２	(58)×70	36.0	M区
ＳＫ３	65×(50)	29.0	M区
ＳＤ１	(180)×150	60.0	N区
ＳＤ２	(1160)×100	50.0	N区
ＳＤ３	(300)×70	30.0	N区
ＳＸ１	(1000)×(160)	10.0	N区
ＳＫ１	125×(110)	55.0	N区
Ｐ１	40×45	5.0	N区
ＳＤ１	(850)×(100)	88.0	O区
ＳＤ２	450×50	14.0	O区
ＳＫ１	(360)×170	20.0	O区

第２表　遺構一覧表

図版番号	写真図版番号	種類・器形・(産地)	口径・器高・底径(又は高台径)	胎土・焼成・色調	形態・調整等	出土位置
17-1	(9-1-1)	山茶碗・碗(東濃系)	—・—・(5.0)	緻密/良好/黄白色	貼り付け高台、高台に籾殻痕	L区SE1
17-2	(9-1-5)	中世陶器・緑釉皿	—・—・(5.3)	密(砂粒含む)/良好/白色	回転糸切り調整、灰釉	L区SE1
17-3	(9-2-2)	中世陶器・仏具	—・—・5.0	緻密/不良/白灰色	二次被熱	L区SE1
17-4	(9-2-3)	中世陶器・さや	(12.4)・—・—	粗(砂粒多い)/良好/黄白色	外面に灰釉、容器として利用	L区SE1
17-5	(—)	土師器・内耳鍋	(26.6)・—・—	密(雲母含む)/良好/茶褐色	半球型、内面ハケ調整	L区SE1
17-6	(9-3-2)	中世陶器・擂鉢	—・—・—	緻密/良好/褐色(断面灰白色)	鉄釉	L区SE1
17-7	(—)	中世陶器・甕(常滑産)	(—)・—・	密(砂粒多い)/良好/褐色(断面青灰色)	外面に降灰	L区SE1
17-8	(—)	中世陶器・甕(常滑産)	—・—・(22.8)	密(砂粒多い)/良好/褐灰色	底部砂痕	L区SE1
—	(9-1-2)	山茶碗・小皿(東濃系)	—・—・—	密/良好/灰色		L区SE1
—	(9-1-3)	山茶碗・碗(尾張系)	—・—・—	密/良好/灰色	貼り付け高台、底部糸切り痕	L区SE1
—	(9-1-4)	山茶碗・碗(尾張系)	—・—・—	密/良好/黄白色	貼り付け高台、籾殻痕、内面摩滅	L区SE1
—	(9-2-1)	中世陶器・羽釜	—・—・—	密/良好/褐色(断面白灰色)	錆釉、鍔の下側に煤付着	L区SE1
—	(9-2-4)	中世陶器・羽釜	—・—・—	密/良好/淡褐色(断面白灰色)	錆釉	L区SE1
—	(9-2-5)	茶釜型タイプ	—・—・—	密/良好/茶褐色(断面白灰色)	(9-2-6)と同一個体か	L区SE1
—	(9-2-6)	茶釜型タイプ	—・—・—	密/良好/茶褐色(断面白灰色)	錆釉	L区SE1
—	(9-3-1)	中世陶器・擂鉢	—・—・—	密/良好/赤褐色(断面白灰色)	口縁部は上方につまみ上げる	L区SE1
17-9	(9-4)	中世陶器・天目茶碗	11.3・6.1・4.2	密(砂粒少し含む)/良好/淡橙褐色	内外面鉄釉	L区SE2
17-10	(9-6-1)	中世陶器・天目茶碗	(11.5)・6.3・(3.8)	密(砂粒少し含む)/良好/淡赤褐色(断面白灰色)	内外面鉄釉	L区SE2
17-11	(9-5-2)	中世陶器・底卸目皿	—・—・9.0	緻密/良好/灰白色	灰釉、見込に三重圏線	L区SE2
17-12	(9-6-4)	中世陶器・蓋	12.2・3.1・—	密(2〜3㎜の砂粒多い)/良好/茶褐色	二次被熱、外面に煤付着	L区SE2
17-13	(9-5-3)	中世陶器・桶	—・—・(14.2)	緻密/良好/茶褐色	底部糸切り痕	L区SE2
17-14	(9-5-1)	中世陶器・さや	—・—・(12.2)	密(3〜4㎜の砂粒多い)/良好/橙褐色	回転糸切り調整	L区SE2
17-15	(—)	土師器・内耳鍋	(—)・—・—	密(雲母含む)/良好/灰褐色	外面に指圧痕、煤付着	L区SE2
—	(9-5-4)	中世陶器・内耳鍋	—・—・—	粗/良好/橙褐色	錆釉	L区SE2
—	(9-6-2)	土師器・内耳鍋	—・—・—	密/良好/淡灰褐色	半球タイプ、外面煤付着	L区SE2
—	(9-6-3)	中世陶器・瓶	—・—・—	密/良好/褐色(断面白灰色)	鉄釉	L区SE2
17-16	(—)	山茶碗・小皿	—・—・4.9	緻密/良好/灰白色	回転糸切り痕、見込に指ナデ痕	L区P14
17-17	(9-7)	山茶碗・小皿	(8.2)・1.1・(5.8)	緻密/良好/灰白色	回転糸切り痕、底部に墨書	L区P11
—	(9-8-1)	折縁深皿	—・—・—	密/良好/淡橙色	内外面ヨコナデ	L区P13
—	(9-8-2)	山茶碗・小皿(東濃系)	—・—・—	密/良好/青灰色		L区P13
—	(10-1-2)	山茶碗・小皿(東濃系)	—・—・—	密/良好/淡灰色	貼り付け高台	L区P20
—	(10-1-3)	山茶碗・碗(東濃系)	—・—・—	密/良好/黄白色		L区P20
—	(10-1-4)	山茶碗・小皿(東濃系)	—・—・—	密/良好/黄白色		L区P20
—	(10-1-5)	山茶碗・小皿(東濃系)	—・—・—	密/良好/灰白色		L区P20
—	(10-1-6)	山茶碗・碗(東濃系)	—・—・—	密/良好/黄白色		L区P20
—	(10-1-7)	中世陶器・丸碗	—・—・—	密/良好/灰色	灰釉	L区P20
—	(10-2-1)	山茶碗・碗(東濃系)	—・—・—	密/良好/灰色		L区P50
—	(10-2-2)	山茶碗・碗(東濃系)	—・—・—	密/良好/灰色	口唇部から内面に降灰	L区P50
—	(10-2-3)	土師器・大皿	—・—・—	密(金雲母含む)/良好/黄白色	底部に糸切り痕	L区P50
—	(10-2-4)	中世陶器・花瓶	—・—・—	密/良好/黄白色	灰釉	L区P50
—	(10-2-5)	中世陶器・擂鉢	—・—・—	密/良好/灰褐色	錆釉	L区P50
—	(10-3-1)	山茶碗・碗(東濃系)	—・—・—	密/良好/灰色	白色粘土帯状に含む	L区P54
—	(10-3-2)	山茶碗・碗(東濃系)	—・—・—	密/良好/黄白色	底部糸切り痕	L区P54
—	(10-3-3)	中世陶器・折縁深皿	—・—・—	密/良好/灰褐色	灰釉	L区P54
—	(10-3-4)	中世陶器・折縁深皿	—・—・—	密/良好/灰白色	灰釉	L区P54
—	(10-3-5)	中世陶器・四耳壺	—・—・—	密/良好/灰色	灰釉	L区P54
—	(10-3-6)	中世陶器・水注	—・—・—	粗/良好/橙灰色	二次被熱の可能性	L区P54
—	(10-3-8)	中世陶器・袋物類	—・—・—	密/良好/褐(断面灰色)	錆釉	L区P54
—	(10-3-7)	中世陶器・天目茶碗と小皿の融着	—・—・—	密/良好/灰色	天目茶碗は鉄釉、小皿は灰釉	L区P54

第3表　遺物観察表

図版番号	写真図版番号	種類・器形・(産地)	口径・器高・底径(又は高台径)	胎土・焼成・色調	形態・調整等	出土位置
—	(10-4-1)	山茶碗・小皿(東濃系)	— · — · —	密／良好／灰色	回転糸切り痕	L区P55
—	(10-4-4)	山茶碗・碗(東濃系)	— · — · —	密／良好／黄灰色		L区P55
—	(10-4-5)	須恵器	— · — · —	密／良好／青灰色	外面平行タタキ	L区P55
17-18	(10-4-2)	山茶碗・小皿	(8.0)・1.3・(5.0)	密(砂粒少し多い)／良好／灰白色		L区P55
17-19	(10-4-3)	陶丸	直径2.3×2.2・重量11.4g	緻密／良好／灰白色	表裏摩滅	L区P55
17-20	(10-3-8)	中世陶器・大型袋物類	— · — · (10.6)	密／良好／褐色(断面灰色)	鉄釉,回転糸切り痕,底部に籾痕	L区P54
17-21	(10-5)	山茶碗・碗(東濃系)	14.8・5.6・5.6	緻密／良好／明灰色	内外面ヨコナデ調整、回転糸切り痕、貼り付け高台、高台に籾殻痕	L区包含層
17-22	(10-7-3)	山茶碗・碗(東濃系)	(14.0)・5.6・(6.2)	緻密／良好／明灰色	内面及び口縁部外面に降灰、高台に籾殻痕顕著	L区包含層
17-23	(—)	山茶碗・碗(東濃系)	(12.2)・5.0・(4.2)	緻密／良好／灰白色	高台に籾殻痕、底部ナデ調整	L区包含層
18-1	(10-7-3)	山茶碗・碗(東濃系)	— · — · (6.0)	緻密／良好／灰色	内面に降灰、高台に籾殻痕	L区包含層
18-2	(—)	山茶碗・碗(東濃系)	— · — · 6.0	緻密／良好／黄白色	底部ナデ調整、高台に籾殻痕	L区包含層
18-3	(10-7-5)	山茶碗・碗(東濃系)	— · — · (4.1)	緻密／良好／灰白色	高台に籾殻痕、見込に輪状凹み	L区包含層
18-4	(—)	山茶碗・碗(東濃系)	— · — · 4.2	緻密／良好／黄灰色	見込に指ナデ痕、高台に籾殻痕	L区包含層
18-5	(—)	山茶碗・碗(東濃系)	— · — · (5.6)	密(白色砂粒少し含む)／良好／黄白色	底部回転糸切り痕、高台に籾殻痕	L区包含層
18-6	(—)	山茶碗・碗(東濃系)	— · — · 4.7	緻密／良好／明灰色	高台に籾殻痕、見込に指ナデ痕、内面降灰	L区包含層
18-7	(—)	山茶碗・碗(東濃系)	(11.6)・3.3・(2.2)	緻密／良好／灰白色	高台が底部中央よりに付く、籾殻痕	L区包含層
18-8	(—)	山茶碗・碗(東濃系)	— · — · (4.9)	緻密／良好／黄白色	底部板目痕、高台に籾殻痕	L区包含層
18-9	(—)	山茶碗・碗(東濃系)	— · — · (5.0)	緻密／良好／黄白色	底部回転糸切り痕、高台底部に籾殻痕	L区包含層
18-10	(—)	山茶碗・碗(東濃系)	(13.3)・3.5・(4.4)	緻密／良好／淡橙灰色	高台の作りは雑、見込を一段低く削る、高台に籾殻痕	L区包含層
18-11	(10-7-6)	山茶碗・碗(東濃系)	(11.9)・3.2・(3.6)	緻密／良好／明灰色	高台はつぶれて扁平、籾殻痕顕著	L区包含層
18-12	(10-6)	山茶碗・碗(東濃系)	12.4・3.6・3.7	緻密／良好／黄白色	回転糸切り痕、見込に輪状凹み、貼り付け高台、高台に籾痕	L区包含層
18-13	(—)	山茶碗・碗(東濃系)	(12.3)・3.5・(4.9)	緻密／良好／明灰色	無高台、回転糸切り痕	L区包含層
18-14	(—)	山茶碗・碗(東濃系)	(12.0)・3.0・(3.3)	緻密／良好／灰白色	無高台、見込に輪状凹み	L区包含層
18-15	(—)	山茶碗・碗(東濃系)	— · — · (3.5)	緻密／良好／明灰色	無高台、回転糸切り痕	L区包含層
18-16	(11-1)	山茶碗・小皿(東濃系)	8.3・1.4・6.3	緻密／良好／明灰色	底部回転糸切り痕	L区包含層
18-17	(11-2)	山茶碗・小皿(東濃系)	7.7・1.2・4.5	緻密／良好／明灰色	底部回転糸切り痕、見込に指ナデ痕	L区包含層
18-18	(11-3)	山茶碗・小皿(東濃系)	8.5・1.1・6.3	緻密／良好／灰白色	底部回転糸切り痕、一度糸切りに失敗し作り直す	L区包含層
18-19	(—)	山茶碗・碗(東濃系)	— · — · 4.2	緻密／良好／明灰色	底部回転糸切り痕、無高台、見込に指ナデ痕	L区包含層
18-20	(11-4)	山茶碗・小皿(東濃系)	8.5・1.0・5.1	緻密／良好／明灰色	底部回転糸切り痕	L区包含層
18-21	(10-8-5)	山茶碗・小皿(東濃系)	(8.8)・1.1・(6.3)	緻密／良好／灰白色	底部回転糸切り痕、板目痕	L区包含層
18-22	(11-5)	山茶碗・小皿(東濃系)	8.4・1.0・5.5	白色砂粒含む／良好／灰白色	底部回転糸切り痕	L区包含層
18-23	(—)	山茶碗・小皿(東濃系)	(7.8)・0.9・(4.3)	緻密／良好／灰白色	底部回転糸切り痕	L区包含層
18-24	(—)	山茶碗・碗(尾張系)	(17.3)・6.4・(7.5)	緻密／良好／灰白色	底部回転糸切り痕をナデ消す、内外面及び口縁部外面降灰	L区包含層
18-25	(11-6)	山茶碗・碗(尾張系)	(16.5)・5.6・7.0	3～7mm砂粒含む／良好／灰白色	底部回転糸切り痕、内外面降	L区包含層
18-26	(—)	山茶碗・碗(尾張系)	— · — · (7.0)	砂粒含む／良好／灰色	体部内面ナデ、摩滅、貼り付け高台、回転糸切り痕	L区包含層
18-27	(11-7-3)	山茶碗・碗(尾張系)	— · — · (7.6)	砂粒含む／良好／灰白色	体部内面ナデ、摩滅、貼り付け高台、回転糸切り痕	L区包含層

第4表　遺物観察表

図版番号	写真図版番号	種類・器形・(産地)	口径・器高・底径(又は高台径)	胎土・焼成・色調	形態・調整等	出土位置
18-28	(−)	山茶碗・碗(尾張系)	−・−・(6.8)	粗(砂粒多く含む)/良好/灰色	見込に指ナデ痕、高台に籾殻痕	L区包含層
18-29	(10-8-6)	山茶碗・小皿(尾張系)	(8.0)・1.9・5.2	密/(砂粒)/良好/灰白色	底部回転糸切り痕	L区包含層
18-30	(11-8-1)	山茶碗・碗(瀬戸)	−・−・5.8	密(1~3mm長石粒含む)/不良/軟質	無高台、回転糸切り痕、見込に指ナデ痕	L区包含層
18-31	(11-8-2)	山茶碗・碗(瀬戸)	−・−・(5.4)	密(砂粒含む)/良好/灰白色	無高台、底部糸見込に指ナデ痕、板目痕	L区包含層
18-32	(12-8-1)	陶丸	直径2.3~2.2・重量12.2g	緻密/良好/灰白色	表面摩滅	L区包含層
18-33	(12-2-1)	中世陶器・平碗	−・−・(5.2)	緻密/良好/灰白色	貼り付け高台、内面施釉、底部糸切り痕	L区包含層
18-34	(12-2-2)	中世陶器・平碗	−・−・4.5	緻密/良好/灰白色	削り出し高台、内面施釉	L区包含層
18-35	(11-9)	中世陶器・端反皿	(9.0)・2.9・(3.8)	緻密/良好/灰色	内外面に鉄釉、削り出し高台	L区包含層
19-1	(12-2-3)	中世陶器・緑釉皿	(9.3)・2.5・(4.4)	緻密/良好/灰色	見込に指ナデ痕、底部回転糸切り痕、口縁部に施釉	L区包含層
19-2	(12-2-5)	中世陶器・重圏皿	(10.8)・2.7・(4.8)	密/良好/淡青灰色	底部回転糸切り痕、体部内外面ヨコナデ	L区包含層
19-3	(11-10)	中世陶器・(名称不明)	−・−・4.7	緻密/良好/白灰色	上面に施釉、底部回転糸切り痕	L区包含層
19-4	(11-11)	中世陶器・仏餉具	−・−・5.4	緻密/良好/黄灰色	内外面に鉄釉、削り出し高台	L区包含層
19-5	(12-1)	中世陶器・仏花瓶	−・−・−	緻密/良好/灰白色	外面に灰釉、底部に回転糸切り痕	L区包含層
19-6	(−)	中世陶器・祖母懐壷	−・−・(11.0)	緻密/良好/褐灰色(断面青灰色)	底部回転ヘラ削り調整、削り出し高台	L区包含層
19-7	(12-2-4)	中世陶器・卸皿	−・−・(5.4)	緻密/良好/灰白色	底部回転糸切り痕	L区包含層
19-8	(−)	中世陶器・卸皿	−・−・−	緻密/良好/灰色、橙灰色	内外面に施釉	L区包含層
19-9	(−)	中世陶器・卸皿	−・−・−	緻密/良好/灰白色	底部回転糸切り痕	L区包含層
19-10	(−)	中世陶器・袋物類	−・−・(10.1)	密(砂粒含む)/良好/赤褐色	底部回転糸切り痕	L区包含層
19-11	(−)	中世陶器・大型袋物類	−・−・(10.4)	密(砂粒含む)/良好/淡褐色	内外面施釉、底部回転糸切り痕	L区包含層
19-12	(12-3-1)	中世陶器・火舎	−・−・−	緻密/良好/灰色	内外面施釉、外面上位と下位に沈線	L区包含層
19-13	(12-3-4)	中世陶器・瓶子	−・−・−	密(砂粒含む)/良好/灰色	外面に線刻模様	L区包含層
19-14	(−)	中世陶器・袋物類	−・−・(11.8)	密(砂粒含む)/良好/赤褐色	籾殻痕、回転糸切り痕	L区包含層
19-15	(12-3-2)	中世陶器・瓶子	−・−・(8.6)	密/良好/白灰色	外面灰釉、底部内面板目痕	L区包含層
19-16	(12-2-6)	中世陶器・大平鉢	−・−・(9.8)	粗(砂粒多く含む)/良好/灰色	貼り付け高台、内面使用痕、底部ナデ、外面タテ方向のヘラ削り後ナデ調整	L区包含層
19-17	(−)	中世陶器・折縁深皿	(−)・−・−	緻密/良好/断面灰色	内外面施釉(灰釉)	L区包含層
19-18	(12-4-3)	中世陶器・折縁深皿	(−)・−・−	密(砂粒含む)/良好/灰色	内外面施釉	L区包含層
19-19	(−)	中世陶器・折縁深皿	(−)・−・−	緻密/良好/灰白色	内外面施釉はがれる	L区包含層
19-20	(12-4-1)	中世陶器・折縁深皿	(22.2)・(6.7)・(12.6)	緻密/良好/灰白色	内外面に施釉(灰釉)、体部下半はヘラ削り調整、見込に櫛描直線文底部回転ヘラ削り	L区包含層
19-21	(12-4-2)	中世陶器・折縁深皿	(17.6)・5.5・(10.0)	緻密/良好/灰白色	内外面に施釉(灰釉)、体部下回転ヘラ削り調整、二条1単位の櫛描直線文(同心円状)3単位	L区包含層
19-22	(12-4-4)	中世陶器・折縁深皿	(23.0)・5.6・(13.1)	緻密/良好/灰白色	内外面に施釉(灰釉)、体部下半は回転ヘラ削り調整、底部回転ヘラ削り、見込に刻印	L区包含層
19-23	(−)	中世陶器・直縁大皿か折縁深皿	−・−・(13.5)	緻密/良好/灰橙色	内面施釉、底部回転糸切り痕	L区包含層
20-1	(12-5-4)	中世陶器・擂鉢	−・−・(8.6)	緻密/良好/茶褐色	14本を1単位とする櫛目	L区包含層
20-2	(9-3-3)	中世陶器・擂鉢	(−)・−・−	密(砂粒含む)/軟質/赤茶色	内面摩滅顕著	L区SE1・SE2
20-3	(−)	中世陶器・擂鉢	(−)・−・−	密(砂粒少し含む)/不良/白灰色	5本を1単位とする櫛目	L区包含層
20-4	(12-5-3)	中世陶器・擂鉢	(−)・−・−	密/良好/褐色(断面白色)	9本を1単位とする櫛目	L区包含層
20-5	(12-5-2)	中世陶器・擂鉢	(−)・−・−	緻密/良好/褐色(断面黄灰色)	11本を1単位とする櫛目	L区包含層
20-6	(−)	中世陶器・擂鉢	−・−・(9.8)	緻密/良好/褐色(断面黄白色)	12本を1単位とする櫛目	L区包含層
20-7	(12-5-1)	中世陶器・擂鉢	(−)・−・−	密(砂粒含む)/良好/淡橙灰色	5本を1単位とする櫛目	L区包含層

第5表　遺物観察表

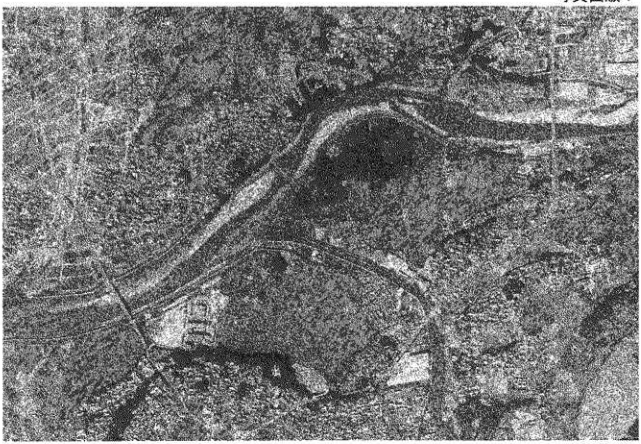
図版番号	写真図版番号	種類・器形・(産地)	口径・器高・底径(又は高台径)	胎土・焼成・色調	形態・調整等	出土位置
20-8	(—)	さや	—・—・(12.0)	緻密／良好／橙灰色	底部回転ヘラ削り調整	L区包含層
20-9	(12-6)	さや	—・—・(10.0)	粗／良好／橙灰色	外面に降灰、底部回転糸切り痕	L区包含層
20-10	(—)	中世陶器・甕(常滑)	(—)・—・—	砂粒含む／良好／青灰色		L区包含層
20-11	(12-2-7)	須恵器・甕	(—)・—・—	密／良好／青灰色	内外面に自然釉	L区包含層
20-12	(12-7-3)	須恵器・甕	(—)・—・—	砂粒含む／良好／青灰色	外面中央を2条の沈線で区画し上位に刺突文	L区包含層
20-13	(—)	山茶碗・甕(尾張系?)	—・—・—	緻密／良好／灰色	外面に押印	L区包含層
20-14	(12-7-2)	須恵器・袋物類	—・—・(3.3)	密(砂粒含む)／良好／淡青灰色	底部回転ヘラ削り調整	L区包含層
20-15	(12-7-4)	須恵器・袋物類	—・—・(7.8)	密(砂粒含む)／良好／青灰色	外面回転ヘラ削り調整	L区包含層
20-16	(12-7-5)	須恵器・大型袋物類	—・—・(—)	密／良好／灰色	内面に自然釉、外面未調整、砂粒付着著しい	L区包含層
20-17	(12-8-2)	土錘	長さ5.9・直径1.6・孔径0.4・重量17.0g	緻密／良好／黄白色		L区包含層
20-18	(12-8-3)	土錘	長さ(4.2)・直径1.6・孔径0.4・重量(11.6g)	緻密／良好／赤褐色		L区包含層
20-19	(12-8-4)	土錘	長さ(4.2)・直径1.4・孔径0.4・重量(8.1g)	緻密／良好／赤褐色		L区包含層
—	(10-7-1)	山茶碗・碗(東濃系)	—・—・(7.2)	緻密／良好／淡灰色	貼り付け高台、内面摩滅	L区包含層
—	(10-7-2)	山茶碗・碗(東濃系)	—・—・(6.1)	緻密／良好／黄白色	貼り付け高台、高台に刷痕、内面に降灰	L区包含層
—	(10-8-1)	山茶碗・小皿(東濃系)	—・—・(5.8)	緻密／良好／灰白色	貼り付け高台	L区包含層
—	(10-8-2)	山茶碗・小皿(東濃系)	—・—・(—)	緻密／良好／明灰色		L区包含層
—	(10-8-3)	山茶碗・小皿(東濃系)	—・—・(—)	緻密／良好／明灰色		L区包含層
—	(10-8-4)	山茶碗・小皿(東濃系)	(8.1)・1.1・(5.0)	緻密／良好／灰白色	底部回転糸切り痕	L区包含層
—	(11-7-1)	山茶碗・碗(尾張系)	—・—・(7.7)	密／良好／灰色	貼り付け高台、高台に刷痕、底部回転糸切り痕	L区包含層
—	(11-7-2)	山茶碗・碗(尾張系)	—・—・(7.1)	密／良好／黄褐色	貼り付け高台、高台に刷痕、底部回転糸切り痕	L区包含層
—	(11-7-4)	山茶碗・碗(尾張系)	—・—・(5.9)	密／良好／灰白色	貼り付け高台、高台に刷痕、底部回転糸切り痕	L区包含層
—	(11-7-5)	山茶碗・碗(尾張系)	—・—・(—)	密(砂粒多い)／良好／灰白色	無高台、底部回転糸切り痕	L区包含層
—	(12-3-3)	中世陶器・瓶子	—・—・—	緻密／良好／白灰色	外面灰釉、線刻文様	L区包含層
—	(13-2-2)	中世陶器・折縁深皿	(—)・—・—	緻密／良好／黄灰色	灰釉	M区SK1
21-1	(13-2-1)	中世陶器・皿	—・—・(9.5)	緻密／良好／灰色	内面灰釉、底部糸切り痕	M区SK2
21-2	(13-2-2)	中国陶磁・青磁	—・—・(4.4)	緻密／良好／赤褐色 断面灰色)	内面に幔縁、見込・外面に施釉、淡緑色	M区SK2
—	(13-3-1)	山茶碗・碗(東濃系)	(—)・—・—	緻密／良好／明灰色		M区SK3
—	(13-3-2)	山茶碗・碗(尾張系)	(—)・—・—	密／良好／灰色	内面に降灰	M区SK3
21-3	(13-4)	土錘	長さ5.8・直径2.0・孔径0.4・重量17.2g	砂粒少し含む／やや軟質／橙色		N区SD1
21-4	(13-8-1)	山茶碗・小皿(東濃系)	(7.4)・1.2・(5.0)	緻密／良好／灰白色	回転糸切り痕	N区包含層
21-5	(13-8-2)	山茶碗・碗(尾張系)	—・—・7.6	緻密／良好／橙黄色	回転糸切り痕の後板目、刻線1条	N区包含層
21-6	(14-1)	中世陶器・直縁大皿	(31.4)・9.8・(14.4)	緻密／良好／灰白色	灰釉、底部回転糸切り痕	N区包含層
—	(13-6)	山茶碗・碗(東濃系)	—・—・(—)	密／良好／白黄色	無高台、底部回転糸切り痕	N区SK1
—	(13-7)	山茶碗・碗(東濃系)	—・—・—	緻密／良好／白灰色		N区SX1
21-7	(14-3-1)	須恵器・坏蓋	(8.2)・—・—	緻密／良好／青褐色	外面に自然釉	O区SD1
21-8	(14-3-3)	須恵器・瓶類	—・—・(6.2)	緻密／良好／灰色	貼り付け高台、底部回転ヘラ削り調整	O区SD1
21-9	(14-3-4)	須恵器・瓶類	(6.5)・—・—	密(砂粒少し含む)／良好／暗褐青色	口縁部に降灰	O区SD1
21-10	(14-3-2)	灰釉陶器・平瓶	(9.3)・—・—	密(砂粒少し含む)／良好／灰白色	自然釉	O区SD1
21-11	(14-3-5)	須恵器	—・—・(9.2)	緻密／良好／橙灰色	回転ヘラ削り調整	O区SD1

第6表　遺物観察表

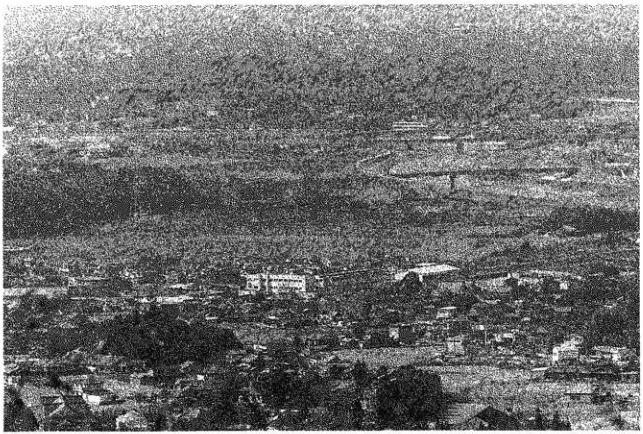
図版番号	写真図版番号	種類・器形・(産地)	口径・器高・底径(又は高台径)	胎土・焼成・色調	形態・調整等	出土位置
—	(14-2-1)	山茶碗・碗(尾張系)	(—)・—・—	密／良好／灰色	内面に降灰	○区SD1
—	(14-2-2)	山茶碗・碗(東濃系)	(—)・—・—	密／良好／灰黄色		○区SD1
—	(14-2-3)	山茶碗・碗(東濃系)	(—)・—・—	密／良好／明灰色	貼り付け高台、釉痕	○区SD1
—	(14-2-4)	中世陶器・平碗	(—)・—・—	密／良好／明灰色	灰釉	○区SD1
—	(13-5)	弥生土器(土師器)	—・—・—	密(砂粒含む)良好／橙黄色	内外面ヘラミガキ調整	N区SD2
—	(14-4)	山茶碗・碗(尾張系)	(—)・—・—	密／良好／灰色		○区SK3
21-12	(14-5)	山茶碗・碗(東濃系)	(13.5)・5.8・(5.4)	緻密／良好／白黄色	内面に自然釉、見込に指ナデ、底部糸切り痕の後板目痕、高台に籾殻痕	○区包含層
21-13	(14-7-1)	山茶碗・碗(東濃系)	(13.8)・5.2・(4.4)	緻密／良好／黄白色	見込に指ナデ、高台に籾殻痕底部糸切り痕の後板目痕(ヘラ記号)?	○区包含層
21-14	(14-6)	山茶碗・碗(東濃系)	(13.1)・5.6・4.2	緻密／良好／灰白色	内外面に自然釉、見込に指ナデ、高台に籾殻痕	○区包含層
21-15	(14-8-1)	山茶碗・碗(東濃系)	—・—・(5.2)	緻密／良好／淡灰色	内面に自然釉、見込に指ナデ底部糸切り痕の後板目痕	○区包含層
21-16	(14-8-2)	山茶碗・碗(東濃系)	—・—・4.8	緻密／良好／淡灰色	内面に自然釉、見込に指ナデ回転糸切り痕、高台に籾殻痕	○区包含層
21-17	(14-7-2)	山茶碗・碗(東濃系)	(12.7)・5.6・(4.2)	緻密／良好／淡灰色	内面に自然釉、見込に指ナデ高台に籾殻痕	○区包含層
21-18	(14-7-3)	山茶碗・碗(東濃系)	—・—・(4.4)	緻密／良好／黄白色	内面に自然釉、見込に指ナデ底部糸切り痕の後板目痕	○区包含層
21-19	(14-8-3)	山茶碗・碗(東濃系)	—・—・4.2	緻密／良好／白黄色	内面に自然釉、見込に指ナデ回転糸切り痕、高台に籾殻痕	○区包含層
21-20	(14-8-4)	山茶碗・碗(尾張系)	—・—・5.3	砂粒少し含む／良好／淡灰色	貼り付け高台	○区包含層
21-21	(14-8-5)	山茶碗・碗(尾張系)	—・—・6.4	緻密／良好／淡灰黄色	貼り付け高台、回転糸切り痕	○区包含層
21-22	(14-8-6)	中世陶器・鉢皿	(18.0)・3.0・(14.8)	緻密／良好／淡灰色	底部砂目跡、内面施釉降灰	○区包含層

第7表　遺物観察表

写 真 図 版

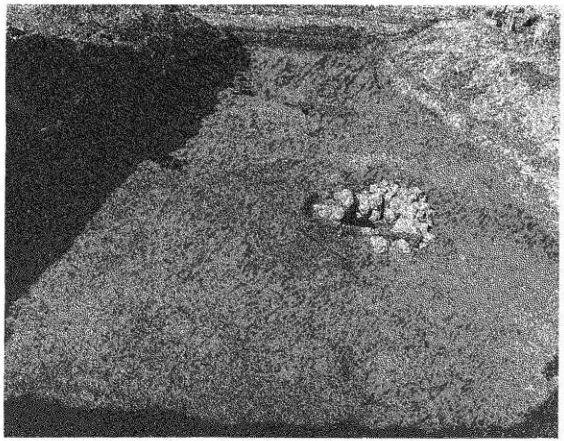


1　遺跡周辺（垂直写真）　1988年撮影

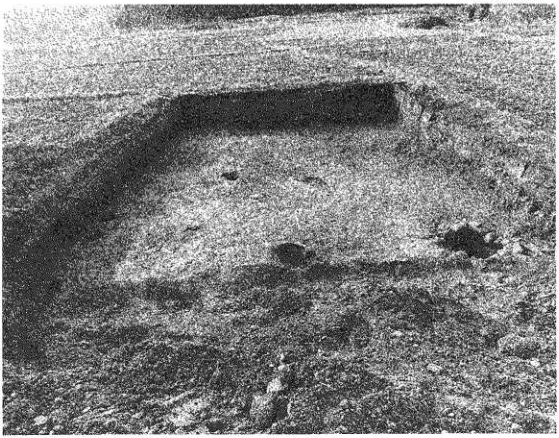


2　東谷山頂から遺跡遠望

１　Ｌ区中央部全景（西から）

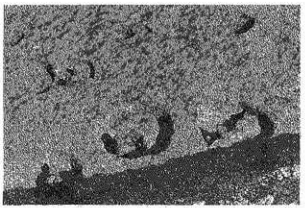


２　Ｌ区全景（東から）

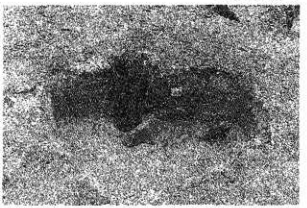


１　Ｌ区南部全景（北から）

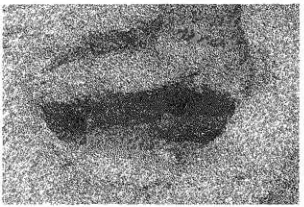
２　Ｌ区北部全景（東から）



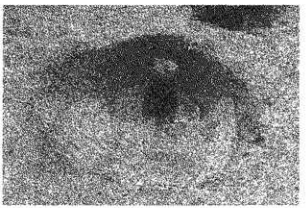
1　L区中央部柱穴群（南から）



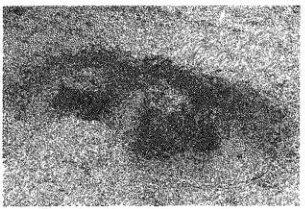
2　L区　P10



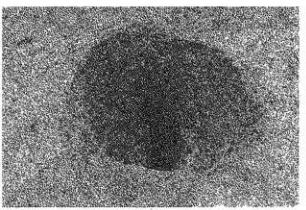
3　L区　P11



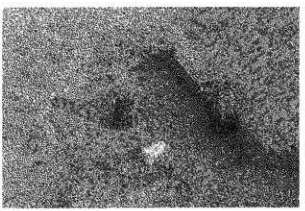
4　L区　P12



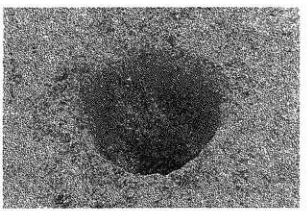
5　L区　P13



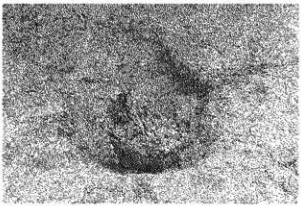
6　L区　P14



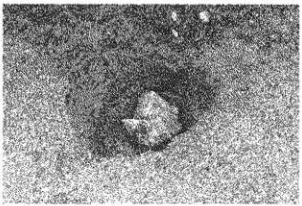
7　L区　P16



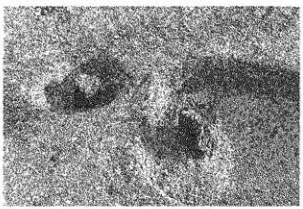
8　L区　P21



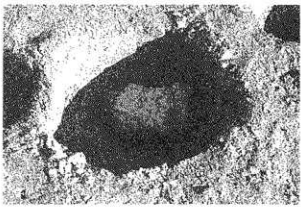
1　L区　P22



2　L区　P25

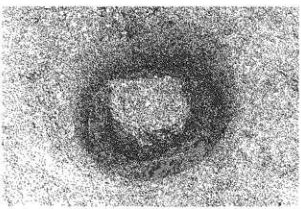


3　L区　P26（左）　P27（右）

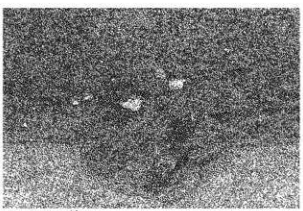


4　L区　P49

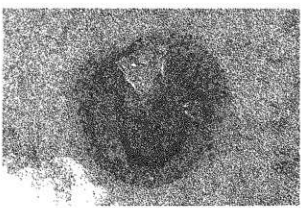
5　L区　P52



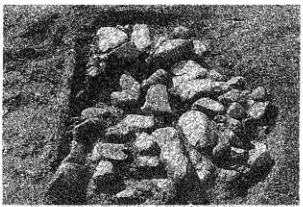
6　L区　P53



7　L区　杭3

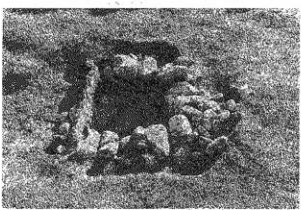


8　L区　杭5

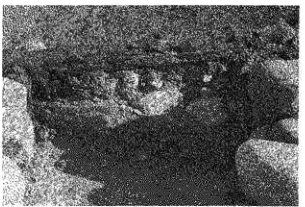


1　L区　SE1検出状況（北から）

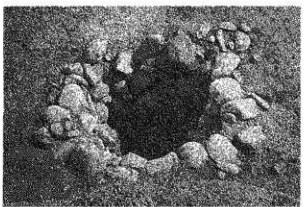
2　L区　SE1掘削状況（西から）



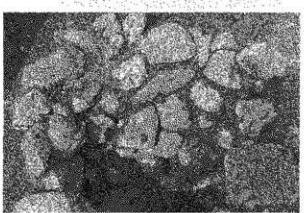
3　L区　SE1（北から）



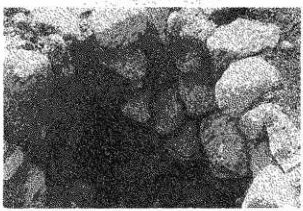
4　L区　SE1東壁



5　L区　SE2（西から）

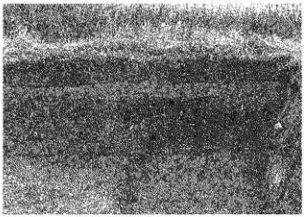


6　L区　SE2北壁

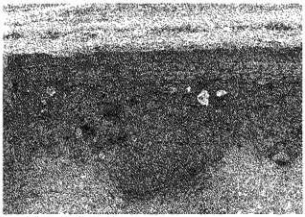


7　L区　SE2南壁

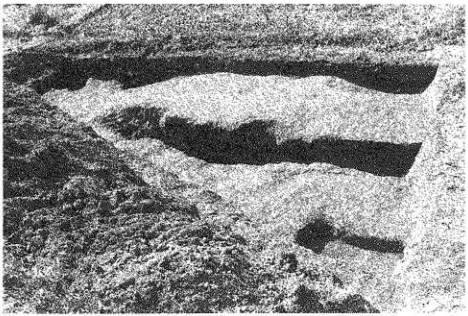
8　L区　SE2遺物出土状況



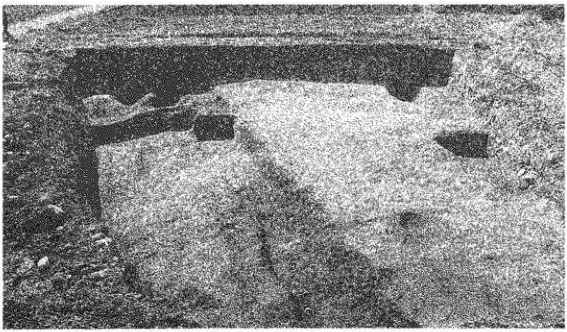
1　L区　中央部東壁土層



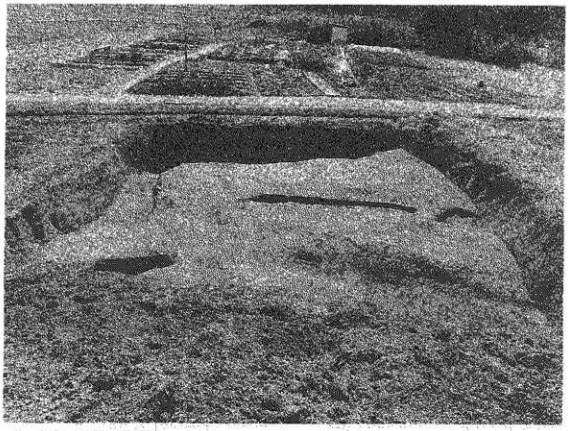
2　N区　南壁土層



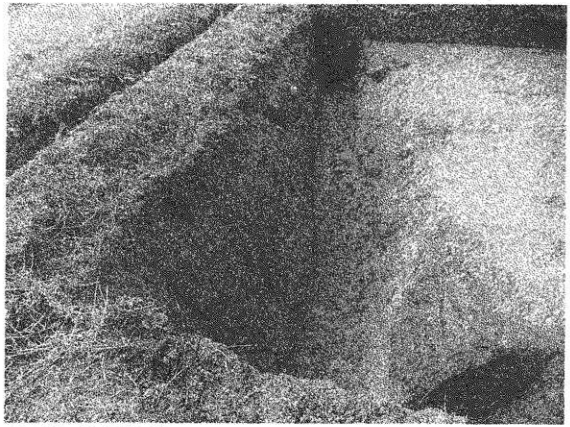
3　M区　全景（北から）



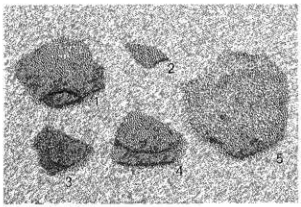
4　N区　全景（北から）



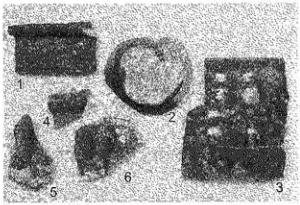
1　O区　全景（西から）



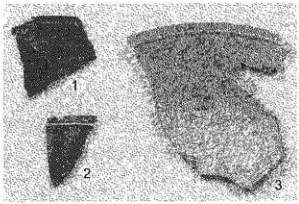
2　O区　SD1（北から）



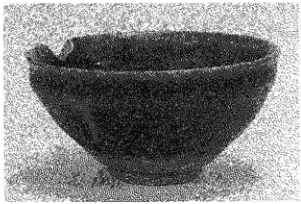
1 L区 SE1

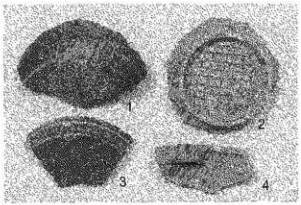


2 L区 SE1

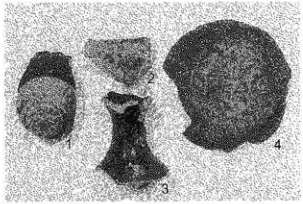


3 L区 SE1

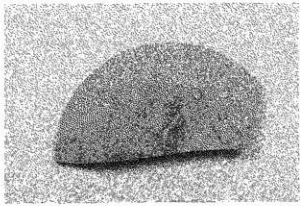

4 L区 SE2

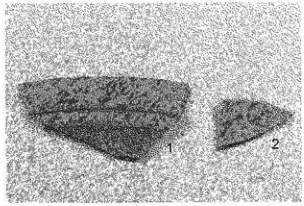


5 L区 SE2

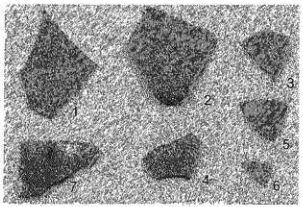


6 L区 SE2

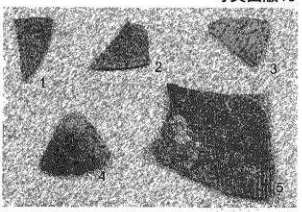

7 L区 P11



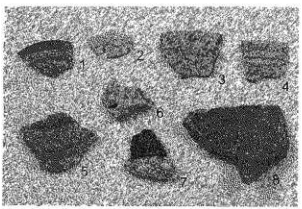
8 L区 P13



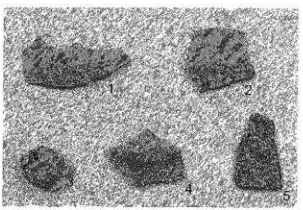
1　L区　P20



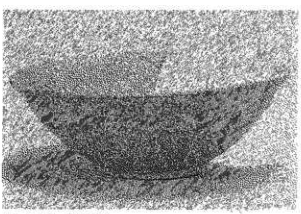
2　L区　P50



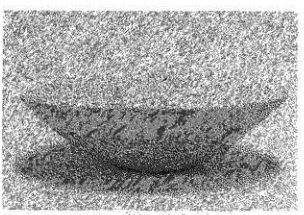
3　L区　P54



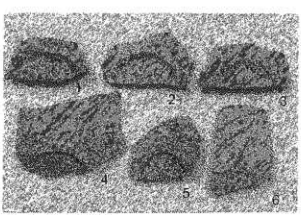
4　L区　P55



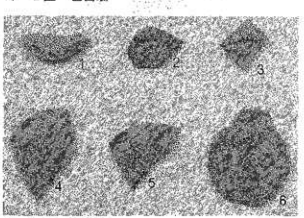
5　L区　包含層



6　L区　包含層

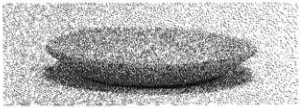


7　L区　包含層

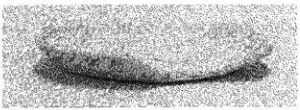


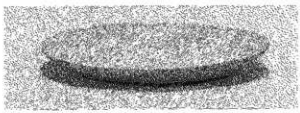
8　L区　包含層

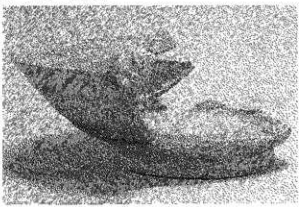
1　L区　包含層

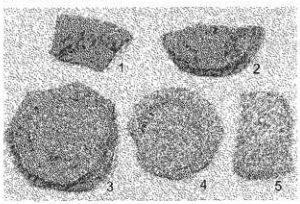

2　L区　包含層

3　L区　包含層

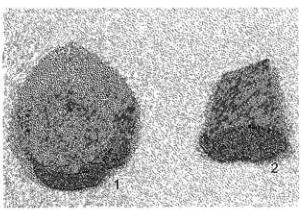

4　L区　包含層


5　L区　包含層

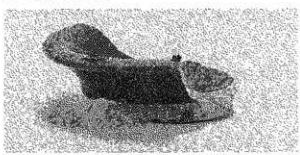

6　L区　包含層

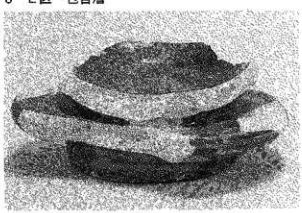


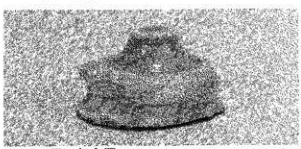
7　L区　包含層

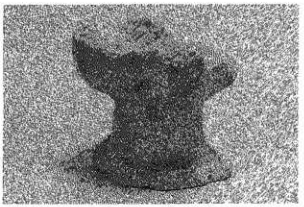


8　L区　包含層

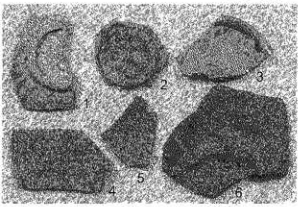

9　L区　包含層


11　L区　包含層

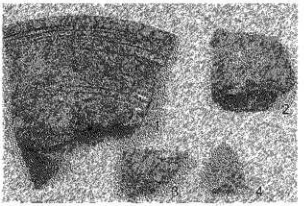

10　L区　包含層



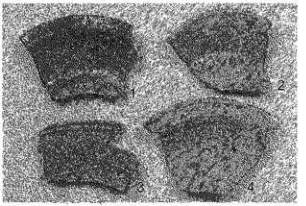
2　L区　包含層



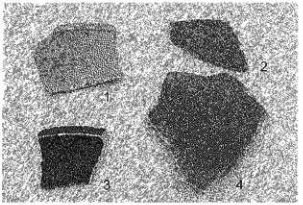
2　L区　包含層



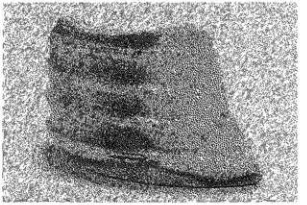
3　L区　包含層



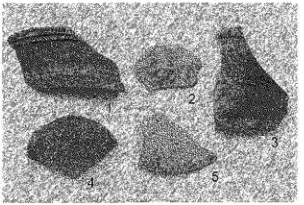
4　L区　包含層



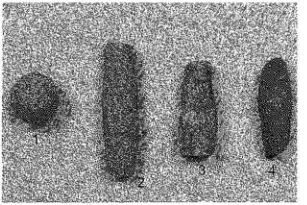
5　L区　包含層



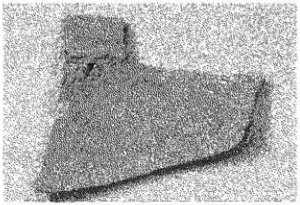
6　L区　包含層



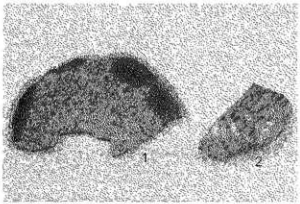
7　L区　包含層



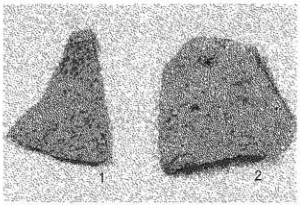
8　L区　包含層



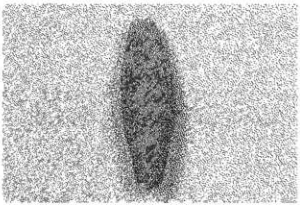
1　M区　SK 1



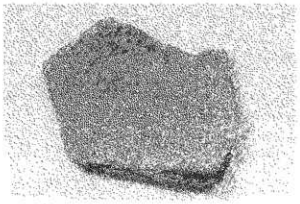
2　M区　SK 2



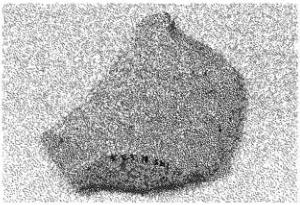
3　M区　SK3



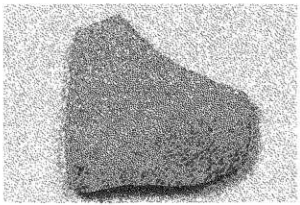
4　N区　SD1



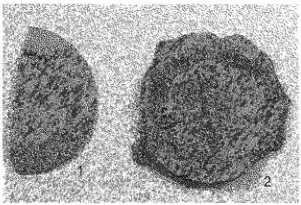
5　N区　SK 2



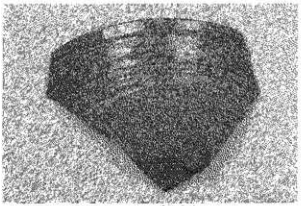
6　N区　SK 1



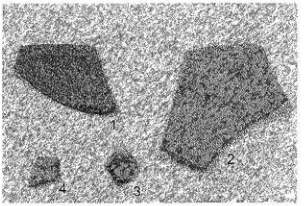
7　N区　SX1



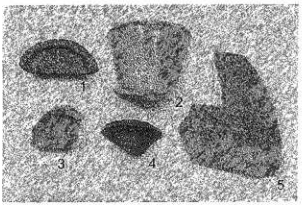
8　N区　包含層



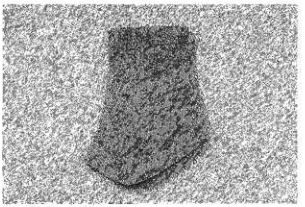
1　N区　包含層



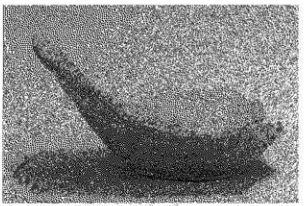
2　O区　SD1



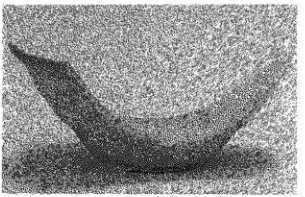
3　O区　SD1



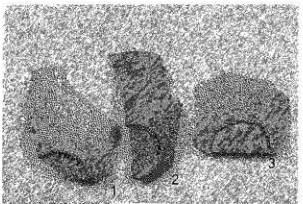
4　O区　SK1



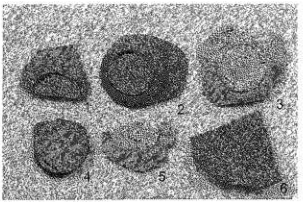
5　O区　包含層



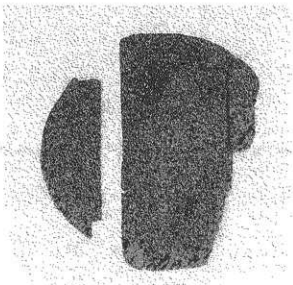
6　O区　包含層



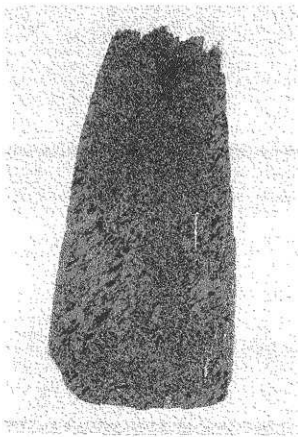
7　O区　包含層



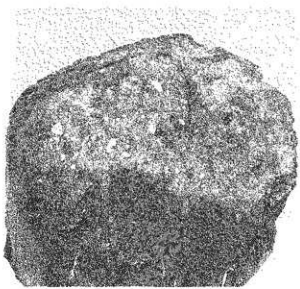
8　O区　包含層



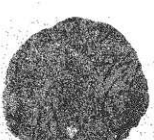
1　L区　SE2　出土木製品



2　L区　杭5



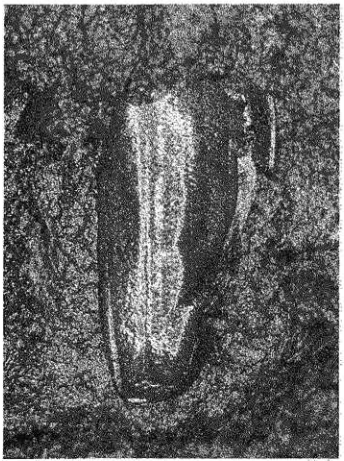
3　L区　杭5



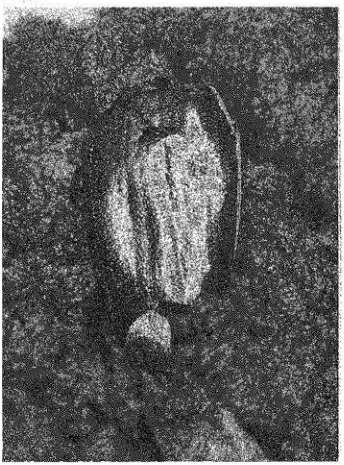
5　L区　P10　出土柱材

4　L区　P10　出土柱材

1



2



名古屋市文化財調査報告書　既刊目録

Ⅰ	H－101号古窯跡発掘調査報告	1973	品切
Ⅱ	古沢町遺跡発掘調査報告　－弥生時代編－	1974	〃
Ⅲ	御影町古窯跡群発掘調査報告	1974	〃
Ⅳ	有松町並み調査報告	1975	〃
Ⅴ	NK1－34号古窯跡発掘調査報告	1975	〃
Ⅵ	徳重西部土地区画整理事業予定地内所在埋蔵文化財発掘調査報告書	1976	〃
Ⅶ	光真寺古窯跡発掘調査報告書	1979	〃
Ⅷ	小幡古墳発掘調査報告書	1980	〃
Ⅸ	NN－278号古窯跡発掘調査報告書	1981	〃
Ⅹ	名古屋市内の山車と神楽民俗文化財調査報告書	1981	在庫
Ⅺ	NN－314号古窯跡発掘調査報告書	1981	品切
Ⅻ	NN－282号古窯跡発掘調査報告書	1982	在庫
ⅩⅢ	NN－268号古窯跡発掘調査報告書	1983	〃
ⅩⅣ	笹ヶ根古墳群発掘調査報告書	1984	〃
ⅩⅤ	名古屋の石造物	1983	品切
ⅩⅥ	天白・元屋敷遺跡発掘調査報告書	1985	在庫
ⅩⅦ	尾張元興寺遺跡発掘調査報告書	1985	〃
ⅩⅧ	天白・元屋敷遺跡第二次発掘調査報告書	1986	〃
ⅩⅨ	古墳地区埋蔵文化財発掘調査報告書	1986	〃
ⅩⅩ	高蔵遺跡発掘調査報告書	1987	〃
21	白鳥古墳第Ⅱ次発掘調査報告書	1989	〃
22	名古屋市守山区志段味地区民俗調査報告書	1989	〃
23	茶臼山古墳発掘調査報告書	1990	〃
24	埋蔵文化財発掘調査報告書	1993	〃
25	鳴海地区須恵器窯跡発掘調査報告書	1994	〃
26	名古屋市山車調査報告書Ⅰ（筒井町湯取車）	1994	〃
27	NN330号窯発掘調査報告書	1994	〃
28	尾張元興寺跡発掘調査報告書	1994	〃
29	名古屋市山車調査報告書2（若宮まつり　福禄寿車）	1995	〃
30	名古屋市山車調査報告書3（牛立天王まつり　牛頭天王車）	1996	〃
31	埋蔵文化財調査報告書24（伊勢山中学校遺跡　第5次発掘調査）	1996	〃
32	埋蔵文化財調査報告書25（高蔵遺跡　第8次・第9次他）	1996	〃
33	名古屋市山車調査報告書4（有松まつり布袋車　唐子車　神功皇車）	1997	〃
34	埋蔵文化財調査報告書26（尚歯遺跡　第12次～第15次）	1997	〃
35	埋蔵文化財調査報告書27（天白元屋敷遺跡第3次）	1997	新刊

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	埋蔵文化財調査報告書27
編著者名	伊藤厚史　森勇一　尾野善裕
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館
所在地	〒457　愛知県名古屋市南区見晴町47番地　　TEL052－823－3200
発行年月日	西暦　1997年12月5日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
天白元屋敷遺跡	名古屋市守山区大字中志段味字青貫1015、字大白990他	23100	1068	35度15分00秒	137度1分50秒	1995.01.27～1995.2.28	640㎡	範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
天白元屋敷遺跡	集落跡	中世	井戸・溝	山茶碗・瀬戸陶器	

名古屋市文化財調査報告35
埋蔵文化財[redacted]調査報告書27
1997年12月5日発行
編　集　名古屋市教育委員会
発　行　名古屋市教育委員会
名古屋市中区三の丸三丁目1番1号
印　刷　株式会社　有文社